北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十六年十月十五日印刷納本
昭和十六年十一月一日發行（毎月一回一日發行）第三十號

現地編輯

THE NORTH CHINA

11

新線の敷設に協力する民衆

北支の鐵道建設

華北に於ける大部分の鐵道は歐米の資本と技術によつて建設され、その利益を壟斷されてきたものであるが、この事變を契機としてそれ等全部の鐵道は國策會社華北交通の手に移され、日本の技術と資本によつてこれを改修し、補强し、更に延長して、日一日面目を改めつつある。それはすべて戰ひながら、夥しい犧牲の上に築かれつつあるのである

橋梁爆破、地雷埋設、軌條拔取、或は軌條はそのままにして、犬釘だけを拔いて轉覆をはかる、大擧して站舍を襲擊するなど、敵はあらゆる手段を使つて建設の動脈を妨碍しようとする

Railway Construction in North China

山を開いて鐵道を建設する

敷設作業

これらの敵に對抗しつつ、不撓不屈の意志によつて日夜必死の努力がつづけられてゐるのだ。「華北交通の爲に死するは是れ國の爲に死するなり」と敢然、挺身し人柱となつて殪れた華北交通の社員は既に八百名を越えた

しかし鐵道建設を阻むものは單に敗殘兵や土匪のみではない。一朝の雨に數十粁の路盤が流失し、廣大な地域が一夜のうちに渺茫たる湖水に化してしまひ、沿線の住民は、田畠はもちろん、衣食住すべてを奪はれ、巷にはふ

鐵道砂塵排除作業に協力する沿線の青年たち

り出されるのである

華北交通では時を移さず修理班を繰出して交通路の復舊に努むる旁ら、難民のため救護班を組織し、あらゆる救濟の方法を講ずるのである

また、黄塵の季節には土砂が線路を埋めてしまふ地方もあり、黄土地帶ではその特異な土質と地形のために鐵道の建設や運行上、特別な苦心を要する

或は寒暑惡疫など、交通從業員は之等のきびしい自然の災害とも闘はねばならぬのである

Railway Construction in North China

東隴海線に於ける砂塵排除作業

然し鐵道の延びてゆくところ、治安が蘇り、死藏の資源が開發され、商工が活潑になり、生活の必需品が安價に供給されるので、沿線の住民はその利福を謳歌して鐵道を愛護しようと團結し協力するやうになつた。卽ち沿線三千萬人の住民は鐵道愛護村を組織してゐるが、實施後未だ日が淺いにも拘らずその效果は著しいものがある。卽ち線路の巡察警備警戒等に積極的に協力奉仕するものは一箇月實に八萬人に上り過去一箇年に彼らが齎した匪賊情報は一萬五千件、鐵道事故を未然に防止したものは七百五十件に上つてゐる。これこそ現實に民路の合作、日華提携を實踐しつつある注目すべき實績である

華北交通經營鐵道六千キロ

竹藪

The Bamboo Grove

竹は北支では珍らしい、寫眞は東南大行山脈が黄河に接するあたり懐慶線清河鎭の竹藪

柏山の甕 その一

The Earthen Vats of Paishan

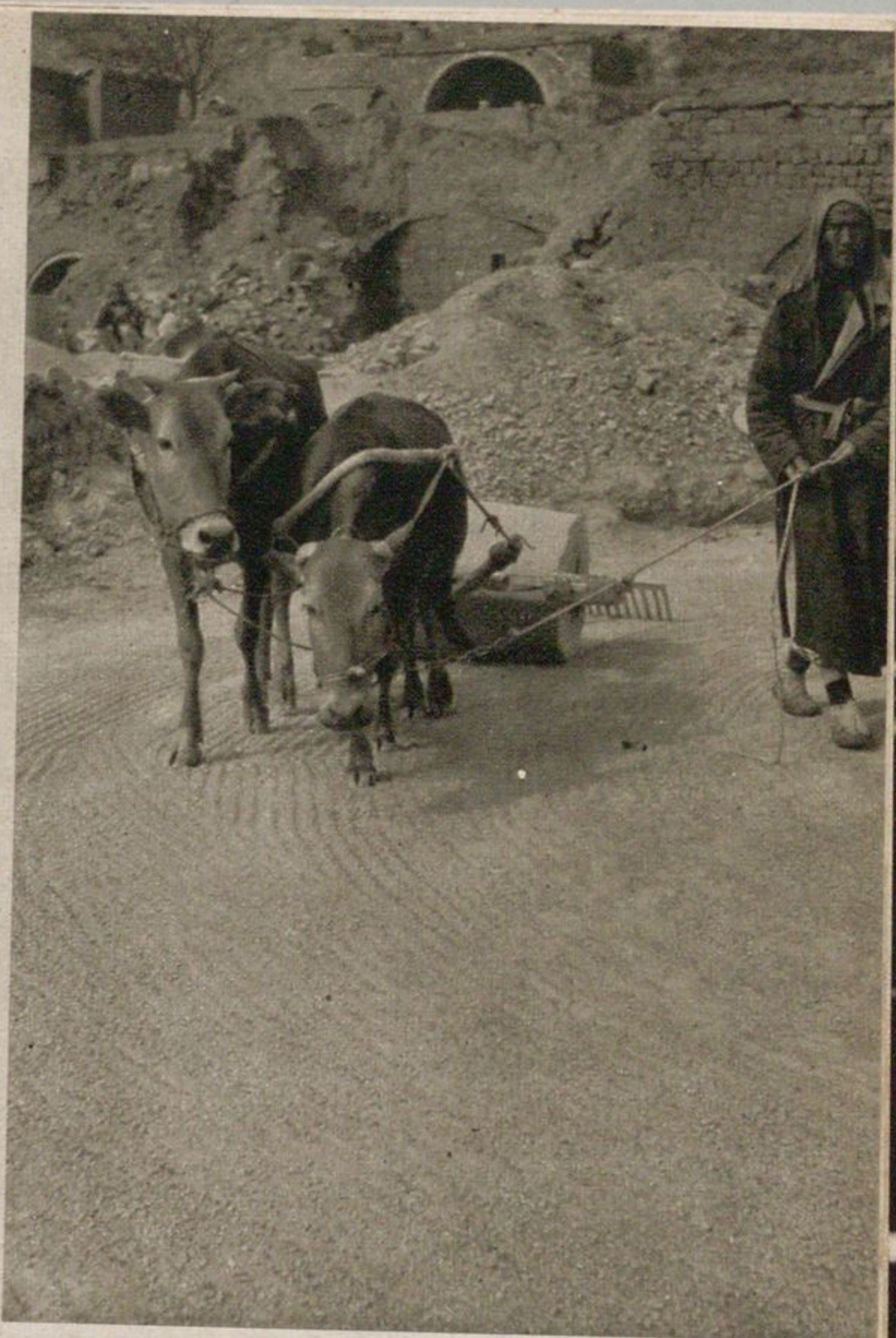
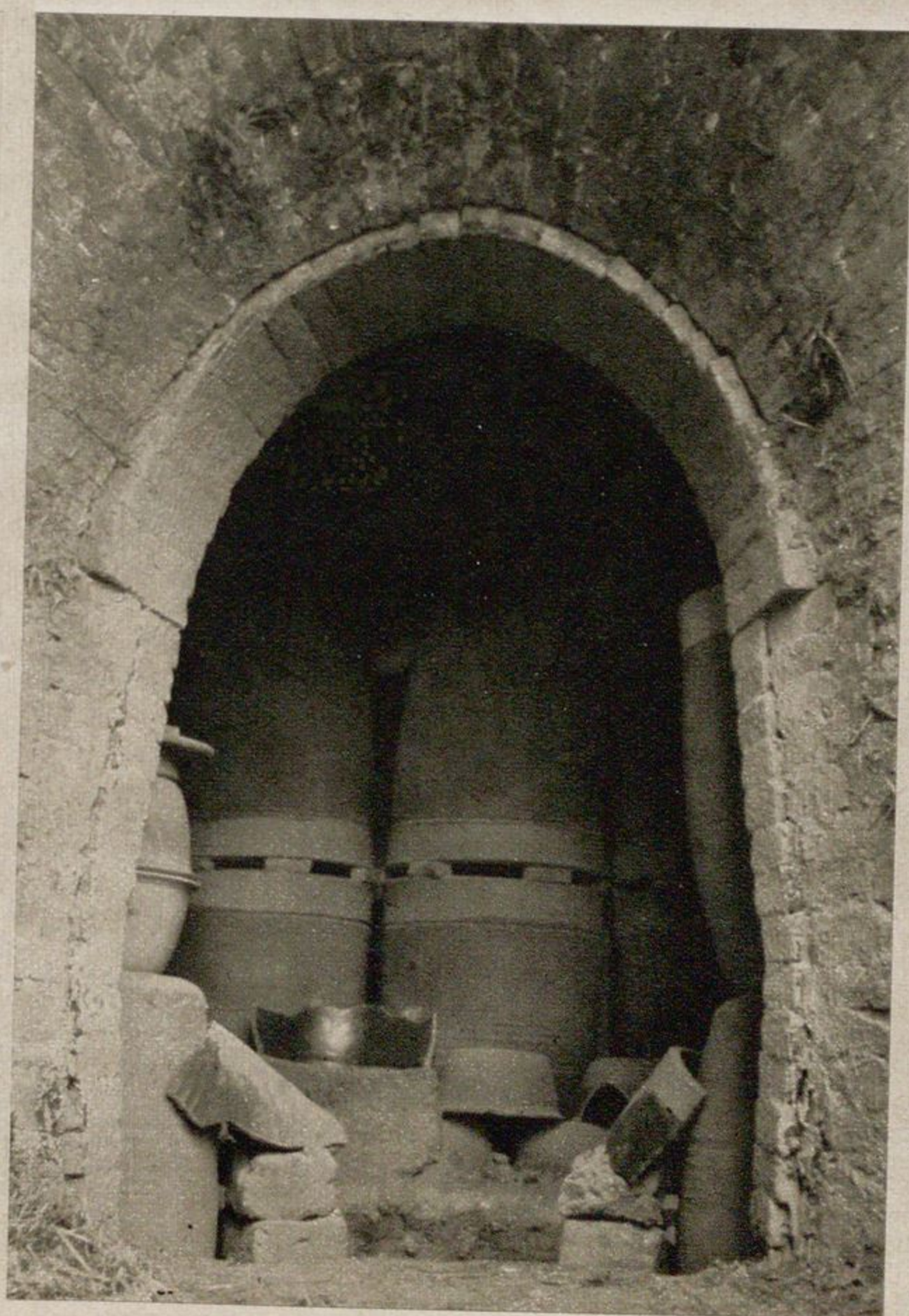
京漢線新郷より西南に走る懐慶線の車窓からは、大小各種の甕を積んだ手押車の列をよく見かける。これ等は皆柏山で焼かれた甕が近縣に運搬されつつある風景である。中には遠く開封あたり迄この手

列車で新郷・開封に運ばれ、そこから各地に分布する

押車を押して數日の旅を續け商ひに行くものもあると云ふ。汽車が柏山に近づくにつれ、土塀の代りに積まれた甕の塀などが目立ち如何にも甕の産地を思はせる

窯場は驛の西北約二粁の南大行山脈の山々に圍まれた帶狀の細長い部落で、戸數約一千四百、その殆んどが先祖代々甕の製造に從事して居る

住民の言によると司馬溫公の故事に用ひられた甕もこの柏山で造られたものであるといふ

窯と左方、山の中腹に穴居住居がある

原料土を輾く、附近一帶の土は殆んど原料となる

彼等は生れながらの甕造りである、またたく間に出來てしまふ

上釉原料は附近に豐富な鐵分のある砂岩である

戸口を開けて窯を冷す

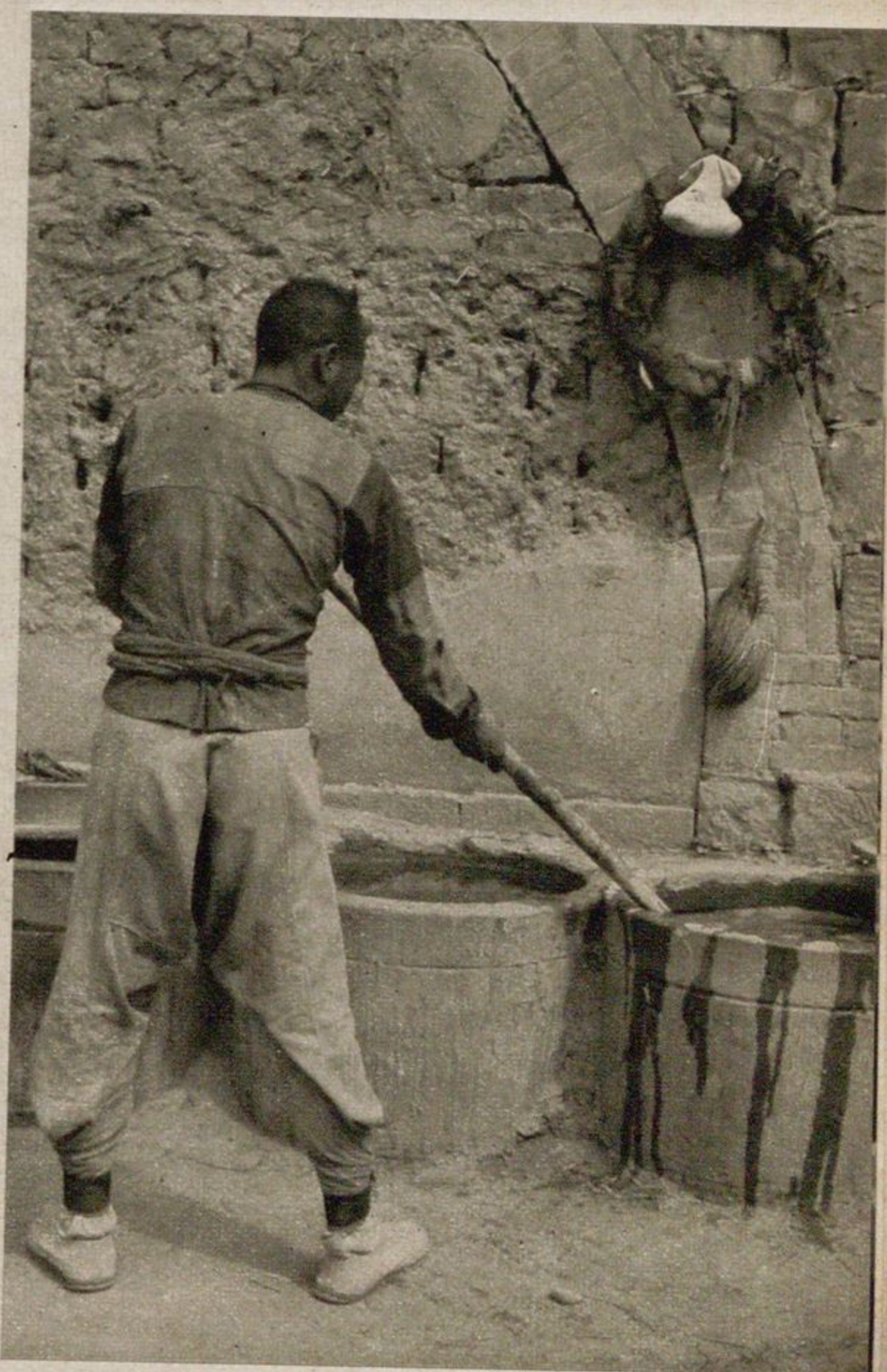
壁のつくろひも甕でまにあはす

轆轤を廻す

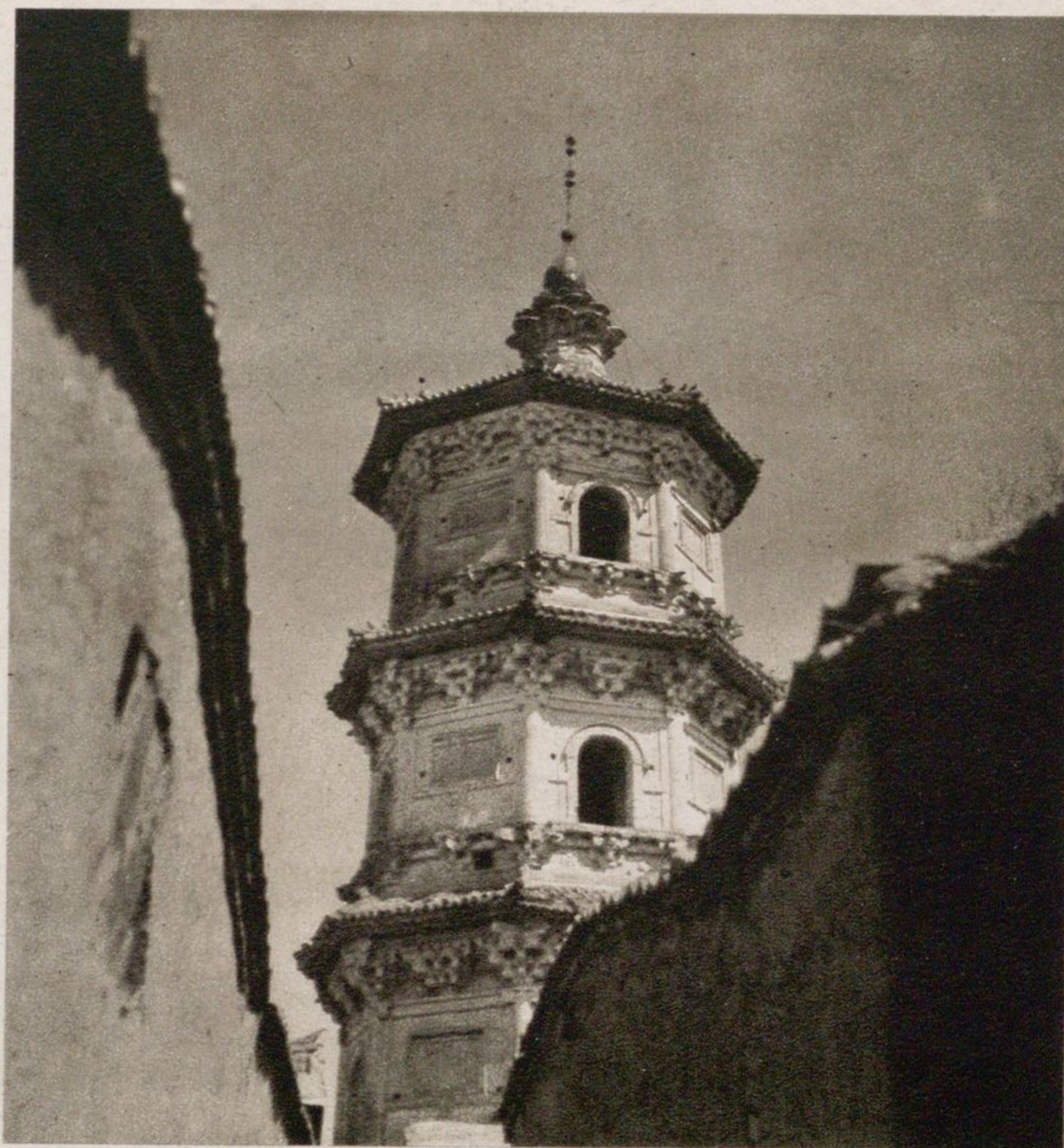
柏山の甕 その二

The Earthen Vats of Paishan

空窯を利用した寺小屋式學校

一輪車で賣りに出る

易縣

Glimpses of I-Hsien

城外の佛塔

荊軻訣別の圖、唐土名勝圖會より

市街所見

易水といふ河の在處は知らなくとも、「風蕭々として易水寒し、壯士一度去つて復還らず」の詩に於ける易水は餘りにも有名である

易水寒しの詩は戰國の世、燕國の太子丹から「恨みを報じ國難を救へ」との祕命を受け、始皇帝を刺すべく遙かなる秦の都咸陽（隴海線西安の西方）に旅立たんとする荊軻が、易水河畔に於て彼を見送る主の太子と惜別の情に堪へず、自ら詠じたと傳へられるところのものである。この易水の沿岸平地に發達したのが易縣城である。位置を鐵道に據つて示せば、北京より京漢線を南下約八十粁の高碑店に分岐して西走する約三十粁の西陵線の終點である

易水の育んだ平野の一角、西方に大行山脈を望んだ縣城は、周圍約六粁、人口六千を算す

物產としては米、雜穀、石炭、石棉、煙草、胡桃等、其他從來羊牧が盛んであつた。尙縣內には砂鐵の有望なるものあり、推定埋藏量は百五十萬瓲と稱せらる

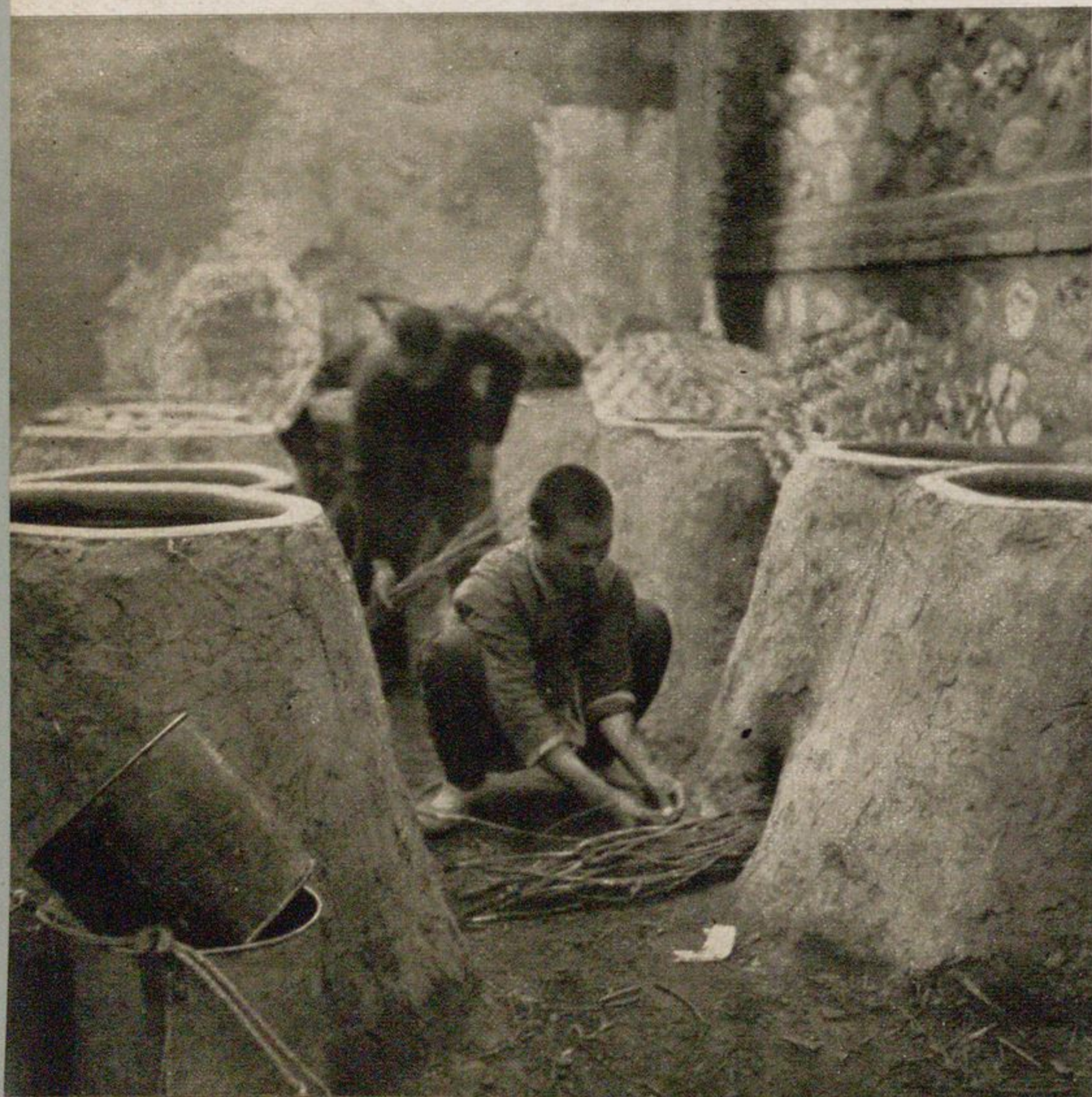
又縣城內には孫臏廟、城隍廟、火神廟興國寺廟、龍興觀等があり、更に易縣站より約十粁餘の地點に、かの有名な清朝の西陵がある

南口附近の柿の收穫

柿

Fruits of North China---Persimmons

柿は北支いたるところに産出する。北京の背後地、大行山脈の山麓一帯に産するものはへたのところに座蒲團を敷いたやうな丸柿が多く、山東や山西のものは長柿で、いづれも澁柿である。澁は湯でぬくのであるが、惜しいことにはその技術がまづくて、澁がよくぬけてゐない

冬、露店で賣つてゐるすつかり冷え切つた熟柿を買つて、ストーブのそばで柿の頭に穴をあけて、匙で掬つて食べる味は、何ともいへない

また、北京では澡塘（錢湯）の入口には入湯の客をめあてに、必ず柿を賣つてゐる。風呂からあがつて食べる冷たい熟柿は、また何ともいへない

南口驛で賣つてゐる柿は、地方の土産品として非常に有名である。これは驛の近くの明の十三陵を中心とする天壽山あたりで出來るもので、この一帶の山村は柿の木で埋もれてゐる

丸柿は干柿としては甘味が少ないが、長柿の干柿は非常に美味で珍重されてゐる。山東の青州地方、津浦線の吳村驛近傍は長柿の名産地で、このあたり柿の熟する頃はまことに壯觀である

干柿は滿鮮地方へ輸出され、北支から出稼いでゐる支那人達は、この味に故鄉を偲ぶといふ

北支の世界的特産の一つとして、柿霜といふものがある。多く山西方面から出るのであるが、それは干柿を壺に入れて、甘粉がふき出ると、一つ一つ丁寧に掃き落し、それを丹念にくりかへして集めたものを袋詰めにして外國に輸出するのである。それは純粹の葡萄糖とかで、醫藥として高價なものであるといふ

柿賣り

澁抜き

シラムレンの河原で馬を飼ふ

シラムレン　その一

厚和から北へ、陰山を越えて更に九十粁程の漢人墾農地帯を過ぎれば、やつと蒙古人のみの天地——牧草地帯に入る。其處にはもう一片の畑地も見られない。附近は海拔千五百から千六—七百米にかけて起伏する丘のうねりが只一色の綠々々、併し時に基盤——結晶片岩、石灰岩、花崗岩、其他脈岩——の洗ひ出された丘が見出される。此處シラムレン——黄色い川、厚和より北へ百六十粁——の一曲にも花崗岩が露出した丘があつた。其の岩肌は風化して黄色を帶びてゐる。この丘を背に南面した處に草原の夢を現に見る様な、美しい喇嘛廟が、乾隆帝の勅により營まれたのであつた。而もその用材は丘の花崗岩に求められたが例に依つて壁は硅藻土を塗つてあるから白く輝き、これに施された燕脂色と黄金箔の點彩が反映する、こんな建築が數箇所あり、これに喇嘛の私宅が幾つもの胡同（小路）を作つて相集る。これを遠望した感じは宛然白雲の王城だ

それらの建物は六面體の輪郭で、而も平屋根であり、この點西藏を越えてイラン文化の東流を想はせる。そして焦茶色の袴に朱の法衣を纏つた喇嘛を點景とし、澄切つた碧空を背景に展がる西域の匂は寧ろかなしい

シラムレンスム（スムとは廟のこと）

後方の花崗岩の丘にある西藏式石佛

シラムレ

紅教に屬するこの廟は烏蘭察布盟唯一の聖地であり、之れが擁する喇嘛は百二三十人程もゐよう。そして月に一回開かれる廟會には善男善女が袂を連ね生畜を伴つて來集する。幸にもシラムレンの河原は、彼等の家畜を放ち合ひ取引きあふには十二分な廣さを提供して居り、廟の西側にある井戸は水質可

と思へば、單なる旅人と雖も彼等の明日を考へずにゐられない。喇嘛教と政治、社會上の問題、生業及び生活樣式と民族文化の問題、民族武裝と自衞訓練等、若き蒙古と共に吾等が協働し研究すべき事の多きに驚く

庶莫、東亞聖業の實踐を示す綏東事變二十九烈士の塔を先づ仰げ、夏雲の流

廟會に集ふ善男善女

ン　その二

綏東事變二十九烈士の記念塔

良、牧草も豐富に。又廟の庫裡は勿論前庭に包が用意されて巡禮をも心よく犒つてくれる。彼等はお互の草地の事、古い長城の話、はては外蒙境の噂など尋ねられるままに、長閑かに語る。此の純朴さを愛したいが此の純朴さの爲に漢人に經濟的な壓迫を受けて來たか

れ變るとも、曠野の朔風荒ぶとも、民族の血潮も鮮やかに、シラムレンの畿頭高く永劫に生きる神國の臣道を啓示して餘す處ない同胞の記念塔、誰か頭を垂れざる。某將軍の句碑に〃いなづまや天に沖する大柱〃かくて此地は蒙疆の新らしき聖地と言はねばならぬ

シラムレン南方ボロボ高原の包、一月半程前に來たといふ

明末・清初の婦人の服装

明末上流婦人の服装
一番上に着てゐるのは雲肩といふ

明末

「上衣」　明末弘治年間では、上衣の長さは僅かに腹部の上のあたりまでであり、絹や金絲の刺繍を用ひてゐた。更に降つて嘉靖の始めの頃は膝のあたりまで長くなつた。「衣裳」は正德年代ではゆつくりしたものが好まれ、その頃「髻」は約三四寸位の高いものが流行した。また嘉靖の頃には高さ六七寸、周圍一尺二三寸もある鐵製の髪飾が用ひられた

明の全時代を通じて「雲肩」といふ雲型の肩縫ひをしたものが用ひられた、これはすでに元の時代には舞衣として現はれてをり、明清に至るまで愛用されたものである。恰も雲の垂れるが如く、青、綠、黃などの絹の生地に美しい刺繡などを施したものである

明末の服裝の最も顯著な特徴は帶の代

清初上流婦人の服裝

Milady's Costumes at the end of Ming and the beginning of Ching Dynasties

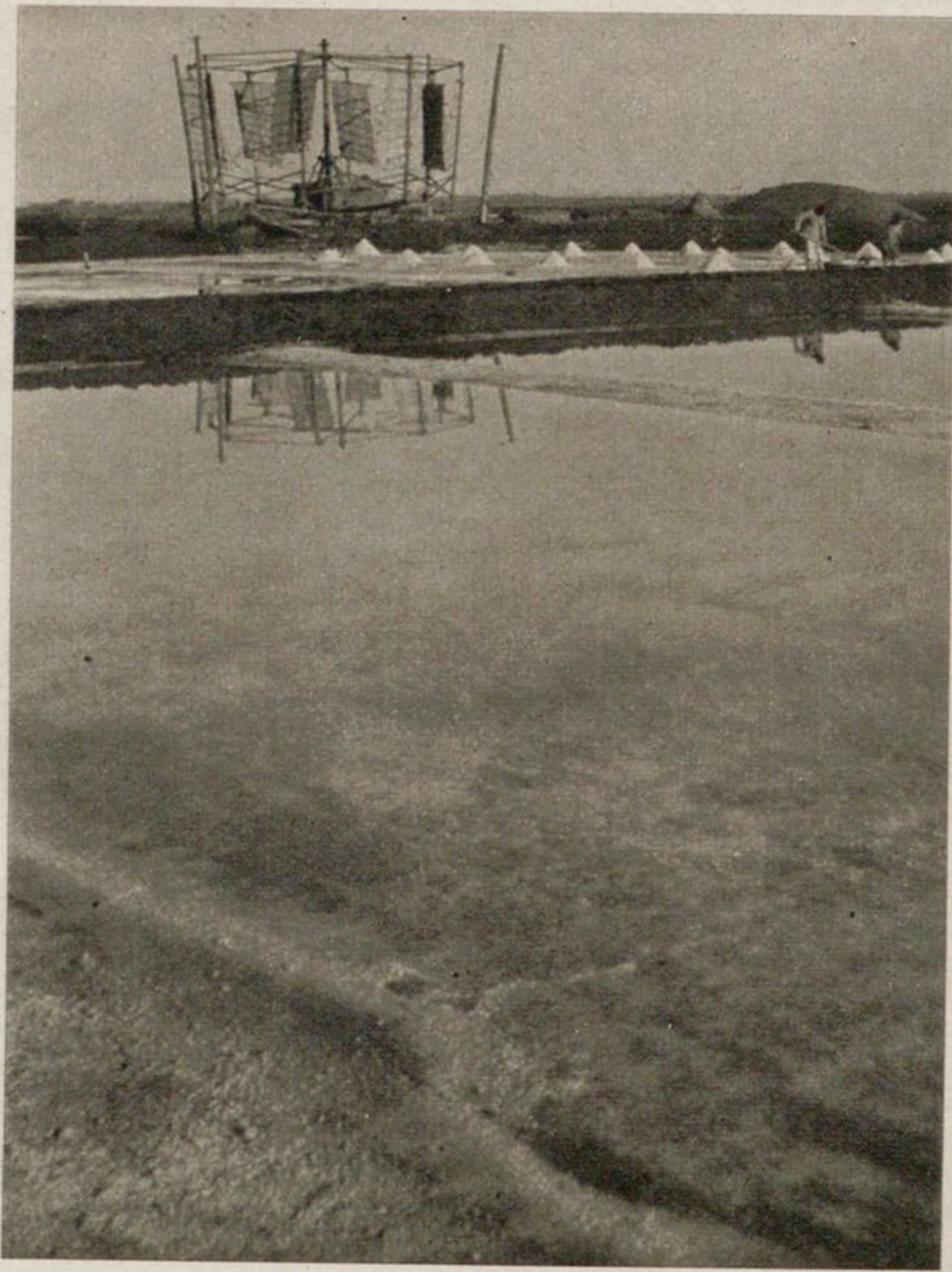
りに「紐釦」（ボタン）が使用せられたことである。これは極めて一般的に上衣に用ひられ、金や銀で作られた。

「鞋」（靴）上流階級の多くは弓鞋（ローヒールとでも言ふべき踵の低いそして纏足用の靴）である。それには絹が用ひられた。これは梁朝時代の名殘である。羊皮に金箔を附けたり、蒲草、麻、葛などで作られたものであるが、それは今日に至るまで殆ど通用してゐる。鞋には爪先のあたりに色々な刺繡を施してある

清初

「衣裳」は明の樣式がその儘用ひられた。順治四年十一月に初めて官民服令が出て、官民それぞれに服地及び服の色が定められたが、田舍の男女の多くは乾隆の初期まで尙ほ明末の服裝を用ひた。

康熙年間に作製された盧龍賑俄圖によれば官吏を除いた婦人は、ことごとく明の服裝で、着物は長く、腰には「汗巾」と言ふ帶の樣なものをまいてゐた。又着物の上部には「嵌肩」（チョッキの如きもの）を用ひた。嵌肩は昔の半臂と稱されるものである。尙ほ、襟の形は種々樣々に作られてゐる

How to Make Salt

北支の
鹽はかうして造る

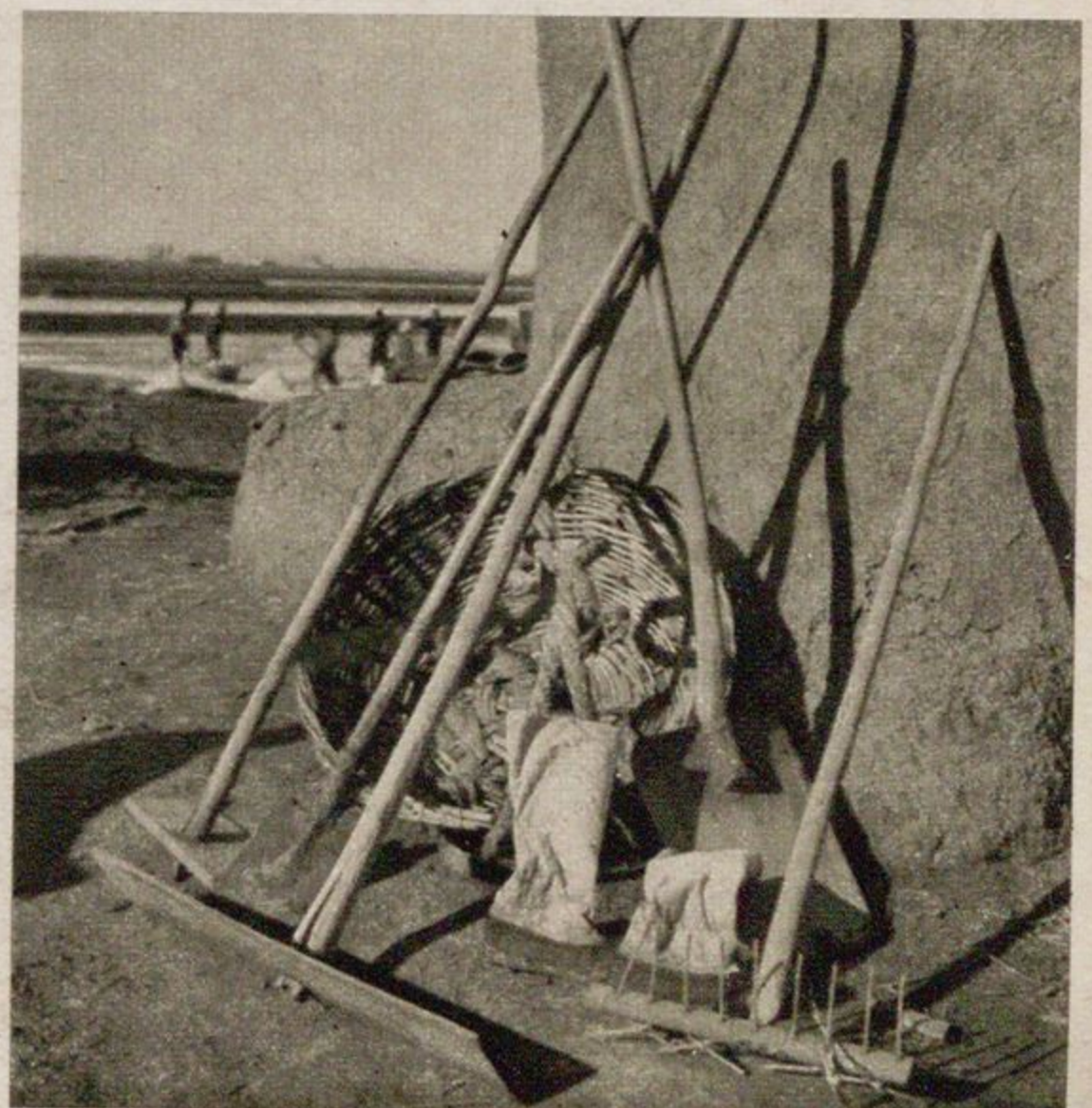
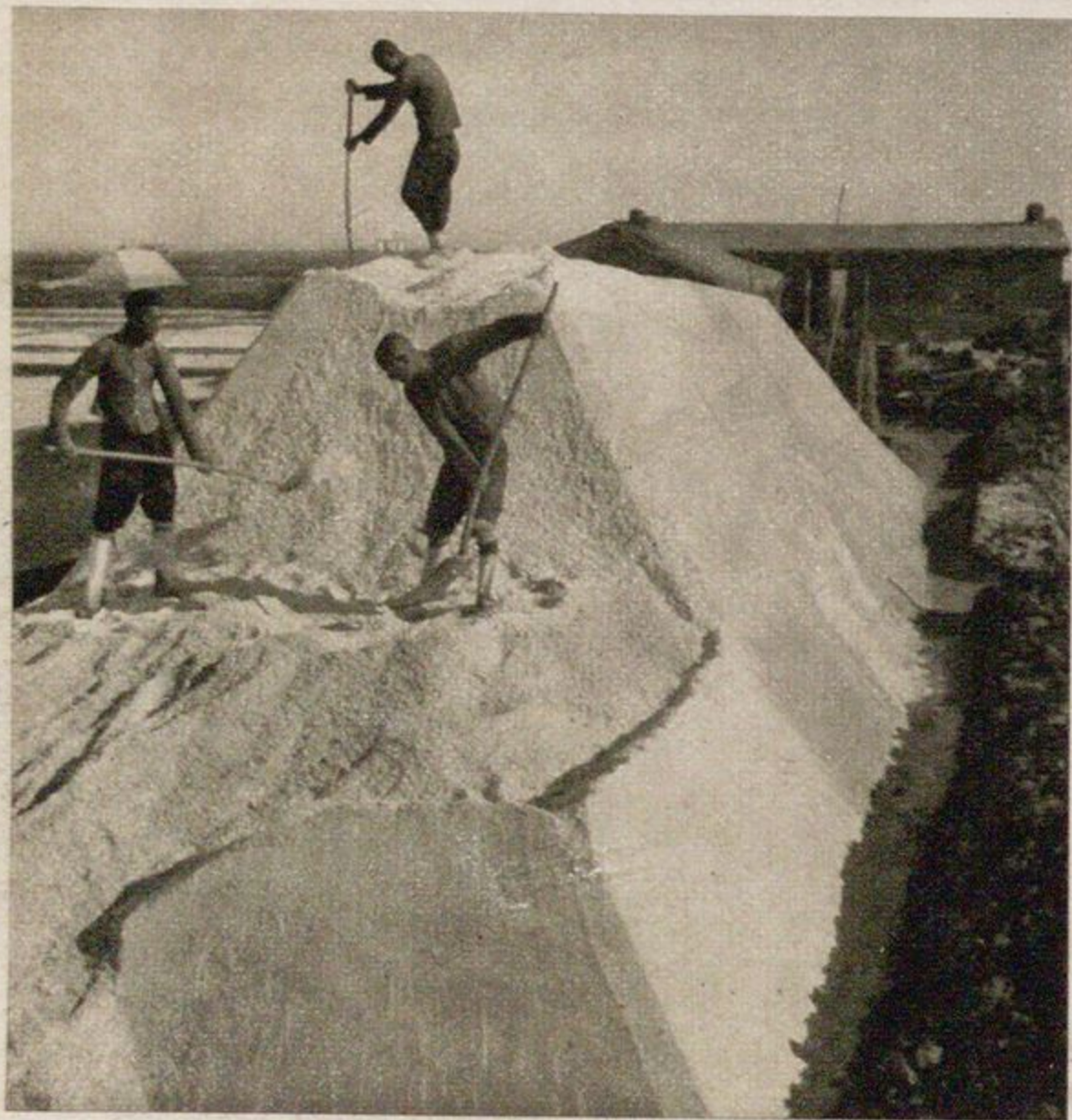
結晶池と風車

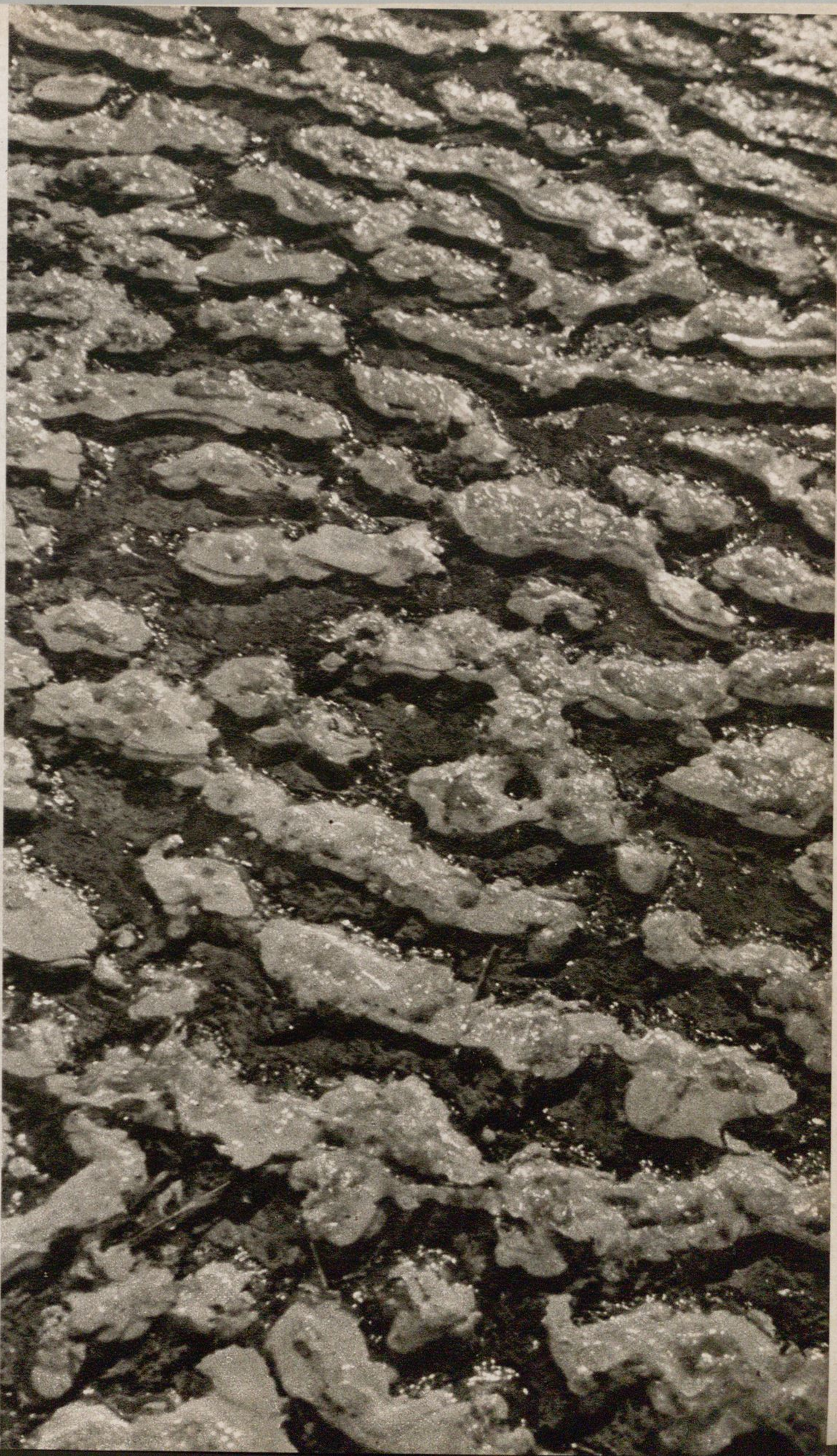
鹽田を造る前に先づこんな雛型を造る、所謂設計圖である

用具──鐵把(くまで)、木揪(木のシヨベル)、靴、筐(カゴ)、木把(土かき)鐵鍬(シヨベル)

鹽夫の靴、固い鹽の結晶を踏む底は鐵鋲を要し、普通の靴では踝から鹽が入るので白布を膝のところまで卷きつける

結晶池から結晶した鹽を鹽垜へ運ぶ

鹽垜の形成、向ふに見えるのは鹽戸

わが國の鹽は、食用だけは國産で賄ひうるが工業用は殆ど國內に產せず、一方、化學工業の發達につれてその需要は鰻上りに增加して最近では年額二百萬瓲近くを海外から輸入してゐる。しかもアフリカ東海岸その他からの遠海鹽の輸入が時局柄いよいよ困難となり東亞圈內に供給地を求めねばならなくなつたので、いきほひ北支の海鹽がその重要性を加へてきたわけである

白河の河口を中心とする長蘆鹽田と山東半島の南北兩海岸にわたる山東鹽田は、その地勢と氣候とにおいて天日製鹽に理想的條件を備へてゐるといはれる。事變前、長蘆鹽田は約九千町步、山東鹽田は約六千町步で双方ともほぼ四十萬瓲程度を產出してゐた。目下鹽田の擴張や製法の改良による增產に大童であつて、純白の鹽の山が日華協力の下にどしどし築かれつつある

中流黄河の結氷

結氷するまでには色々の模様をつくつてゆく

包頭附近の黄河、結氷の季節に入る

河岸を切込んでドックをつくる

Ice Floes on the Yellow River

河套に冬が訪れると、微かな響を立てながら黄河の流氷が初まる。するとその曲流の外角に當る軟い黄土質の崖は、この流氷に脆くも突き崩されて行く。それが大方十二月の下旬で、それから一週間も經てば愈〻結氷する併しその凍り初めには、流氷塊の表面だけが平滑で、その相互間は流氷塊の相擦で碎けたガラガラの氷片の集結である。これが眞冬に入つて日が經つにつれ、風と日射の働きで、平滑になつて行くが、更に其の後になると、晝間解けた表面の水分が夕方寒風の吹きつけに依つて再結氷する時美しい波狀の模樣を示すことがある

又河面全部が完全に結氷することは珍らしく、よく一部に結氷しない處が生ずる。これを〃氣眼〃と言つてゐる。物資に飢ゑた對岸の敵地區――オルドスから夜陰に乘じて渡つて來る密輸隊が、買ひ込んでの歸りしなに、この氣眼に落ち込むことも屢〻と言ふ

この氷が解けかかるのは略〻三月の中旬で、かくて一陽來復すれば、河套の新風景プロペラ船が又動き出す

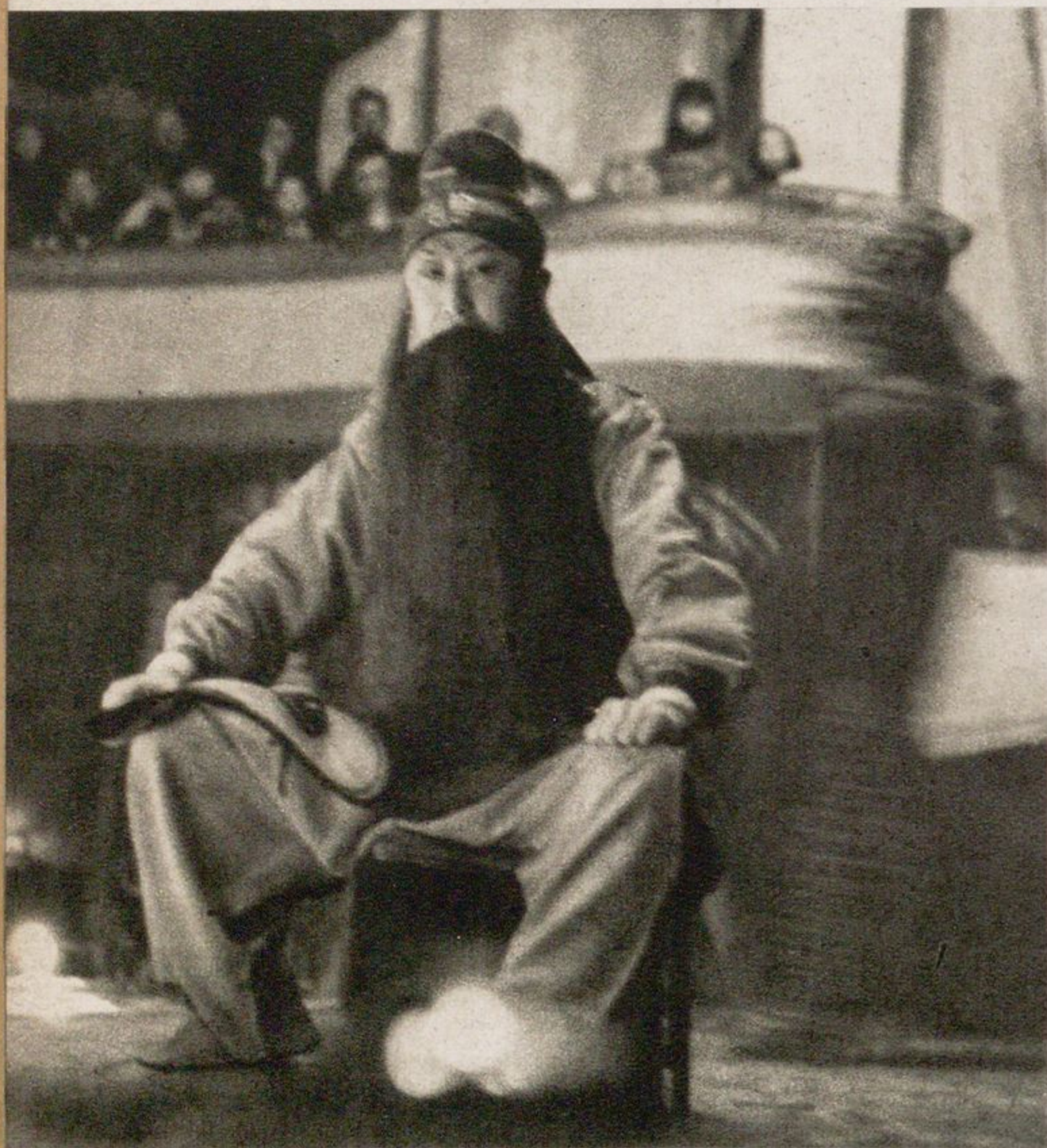
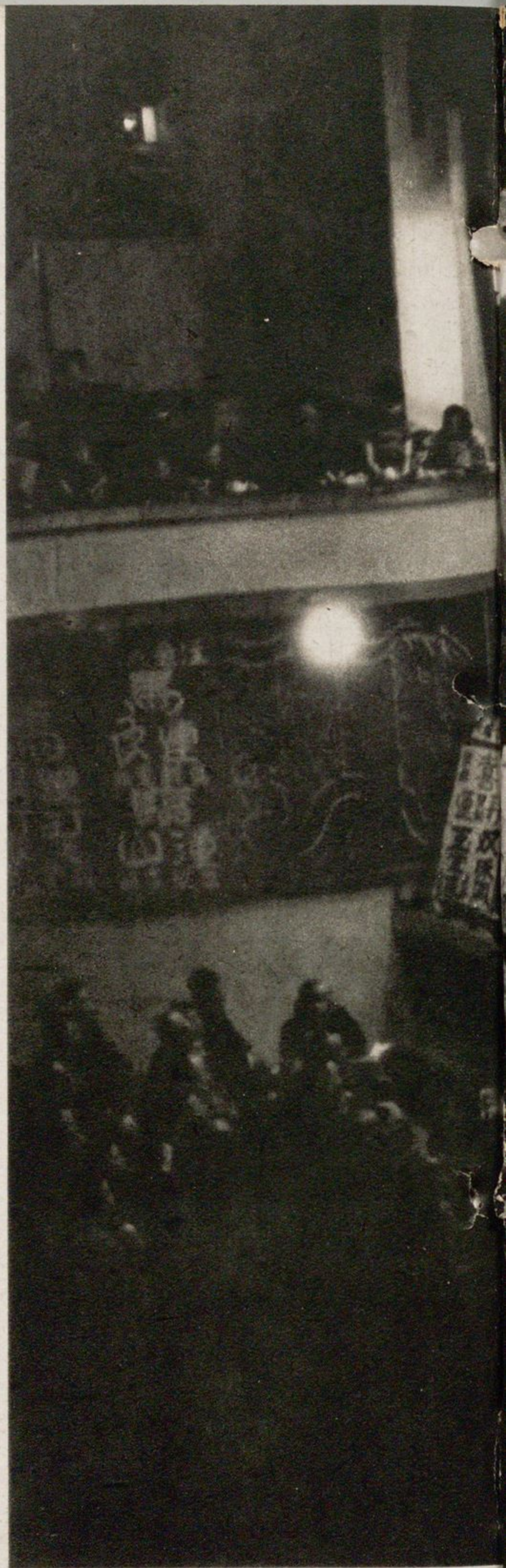
北京、新々戯院に於ける「打魚殺家」の舞臺面

この京戯「打魚殺家」（詳細は後部讀物欄に在り）の主役は父蕭恩に扮する馬連良と、娘桂英に扮する張君秋である。馬連良は老生俳優として當代一の人氣者である。富連成社といふ俳優養成所の出身で、傳統の演伎法に彼自身の工夫になる表情所作等の新機軸を加味して、馬派と稱せられる一種の藝風を編み出した。喉には餘り惠まれてゐないので唱よりも做白（所作とせりふ）で立つてゐる。張君秋は票友（アマチュア）出身で、これも女形の內の青衣（正旦）俳優としては、當代新進の筆頭であり、四小名旦（四人の名女形男優）の一人となつてゐる。喉が好く專ら唱を以て立ち、登壇以來常に馬連良の一座に在つて馬の女房役を勤め、當代無雙の名コンビを謳はれてゐる。扮裝の容貌も非常に美しく、一代の美貌梅蘭芳の盛時にも劣らぬものがある

京劇「打魚殺家」

A Scene from the Chinese Drama---Peking

蕭恩父に扮する馬連良

娘桂英に扮する張君秋

An Old Chinese Masterpiece

一羊圖 宋代?

筆者不詳

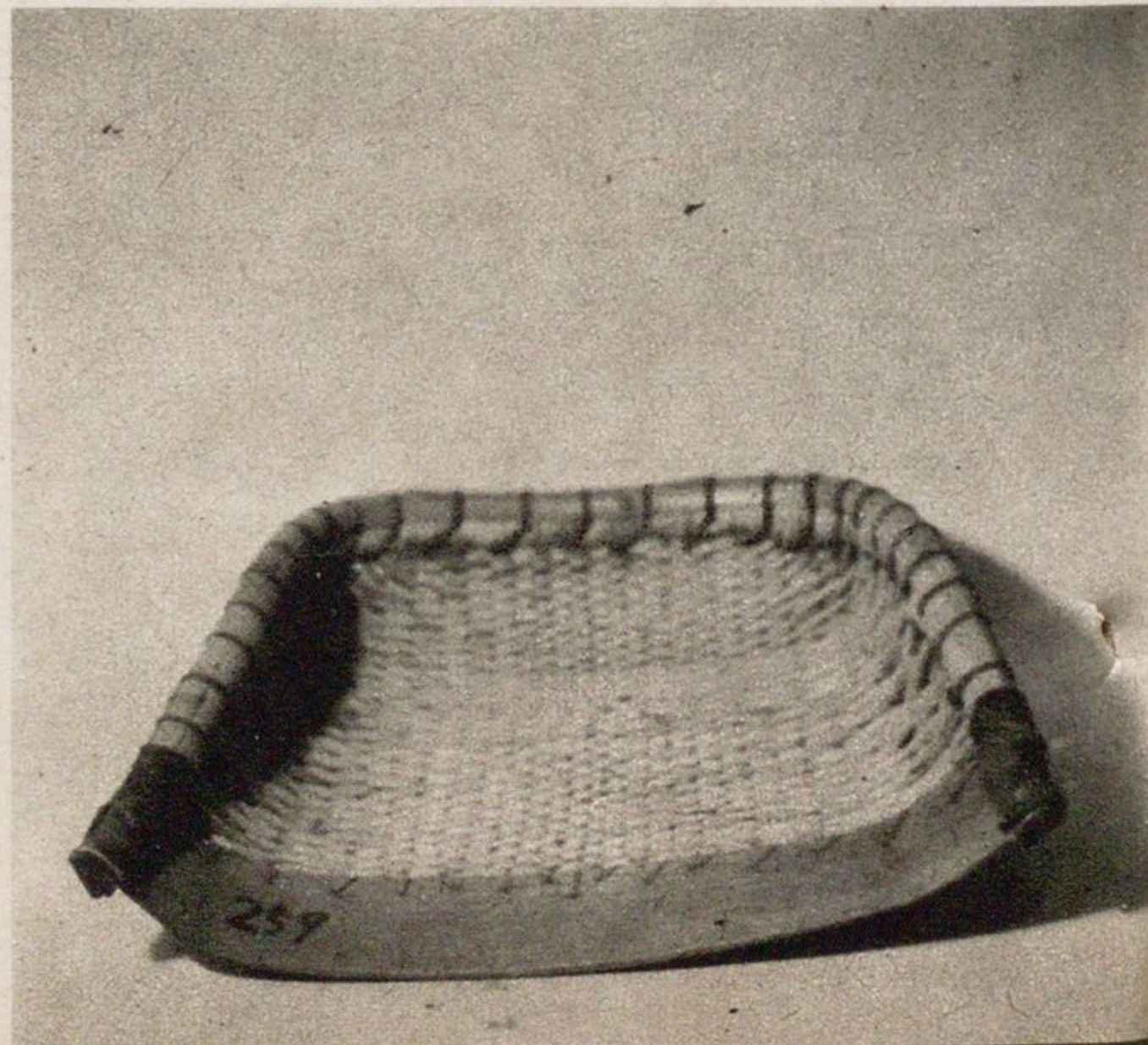
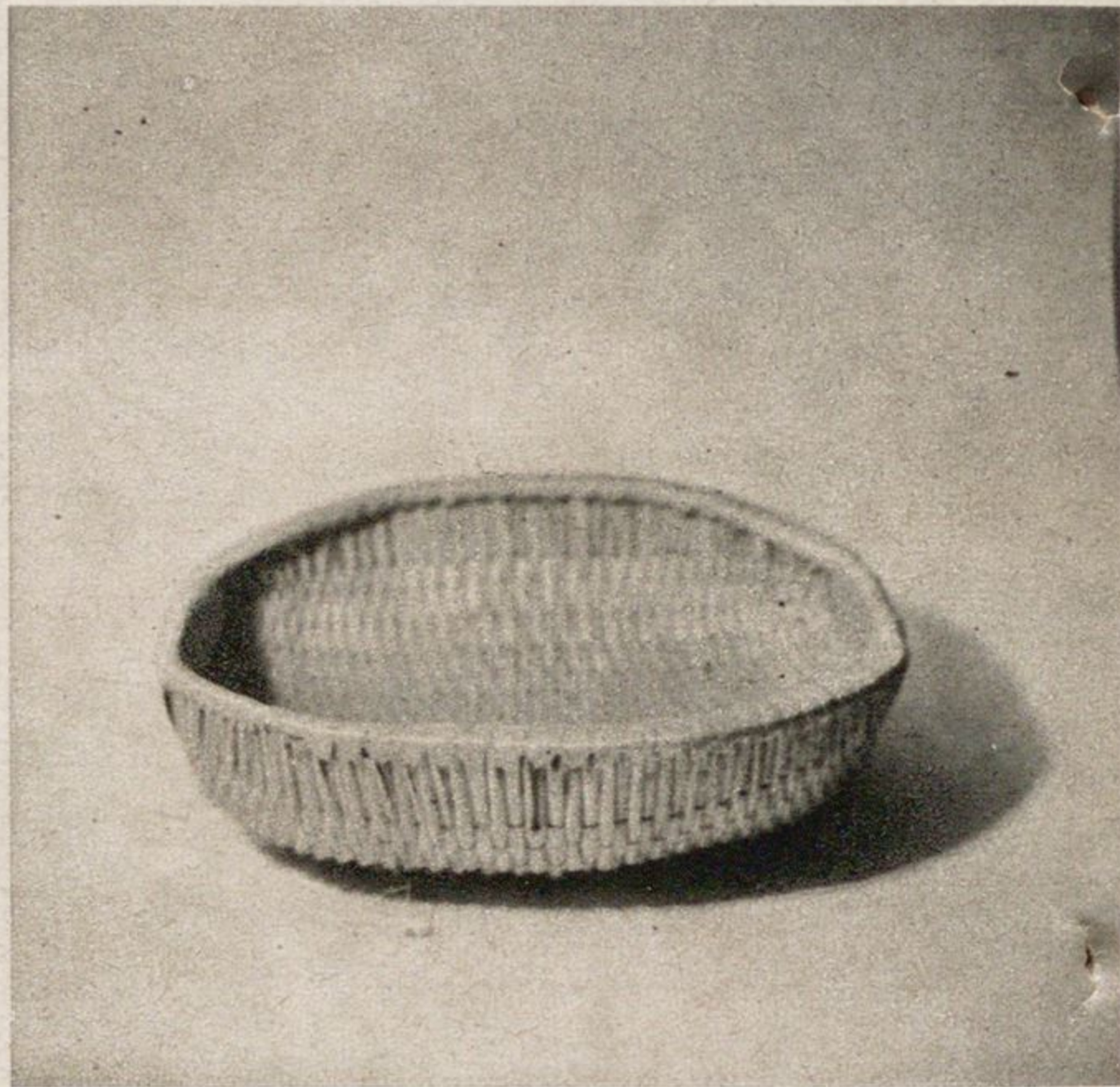
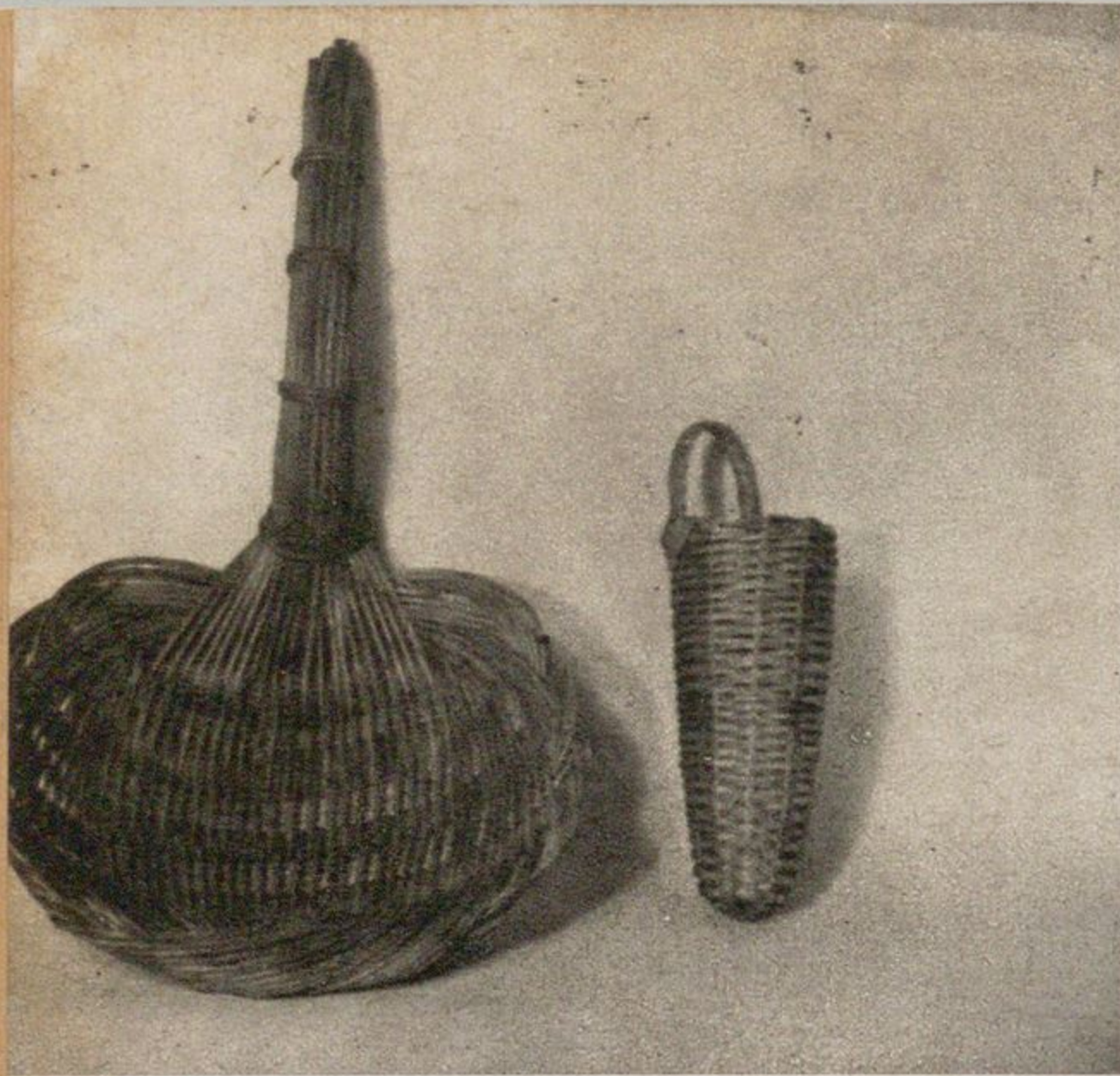
この畫は筆者が不詳のため斷言は出來ぬが宋畫と信じたい。あまりよすぎるから、明畫かとも思ふが、羊でも、木でも、波でも、どうしても宋のものである。明代の美術は、殊にその古典主義の畫派に於て、北宋への復古が目的とされたから、畫でも、陶瓷器でも、銅器でも、宋代のものと辨別のつきかねる作品がある。コッピーのあるものは、むしろ宋のもの以上に宋らしいものさへある。しかし、とにかくこの畫は筆のしつかりした、そして驚くべき寫生の確かな傑作である。特にその氣品と、觀察の鋭い點には敬服する

これは大きい畫の一部分を切り取つたもののやうにも思はれるが、さうではなく、いはゆる馬遠風の一角畫——自然の一隅のスナップであらう。さう思つて見ると、馬遠一派の作の感じである。馬遠は普通には、圭直な線の山水、樹木の畫家として知られてゐるが、しかし馬遠も、その兄の逵も、遠の子の麟もみな花鳥にもすぐれてゐたことを思へば、このくらゐな羊は描けたであらう。いづれにしても、支那繪畫の最上の一つである

北京、隆福寺の廟會にて

Wicker-Work

柳枝細工

北支名物柳枝細工は、北京の南、永淸縣地方が主産地である。同縣志に曰はく、東鄕、濱河、河東、韓村陳、各莊一帶は、土地磽瘠にして沙域多く、五穀に宜しくない。居民は率ね柳樹を植ゑ、柳樹の大なるものは伐つて薪となし、炭となし、細きものはその柔枝を折つて柳器を編む。貧民は往々これを業とする。この柳枝を採るのは夏秋の間である。早すぎると液が多くて弱く、遲過ぎれば疎燥にして堅いので利用できない。大きい器は數石も容れ得る筐となし、小さいものは直徑二寸足らずの圓盤にも造る。その細工の多少によつて値が定まる。この柳枝細工人は、地中に窖居してその中に篝火を焚いてをり、日のあけ暮れるのをも知らない。それは柳枝を狎らすのに必ずまづ水で柔らげ、その靑皮を削り、眞白く磨いてから自在に屈曲されるやうにする。これを風に當てると脆くて折れるので、窖中で細工をする。老幼男婦、一日ぢゆう力を協せて、やつと生活の糧が得られる。居民は專ら柳細工で斗量の器を造り、その器が巧みならば褒められる。鄕黨の人は相約してこの法を女子には傳へない。その女子が他村に嫁して夫の家に祕傳を授けることを嫌ふからである、と。民藝、民藝といふが、民藝の裏にひそむ、血と汗と、しひたげられた下層民の窖中における生活苦とを考へる必要がある。最近何故か、その生産が極めて少くなつた。

蒙古行

ゐないし、前年耕作した場所には何も作らず施肥もしない。獲れただけとく

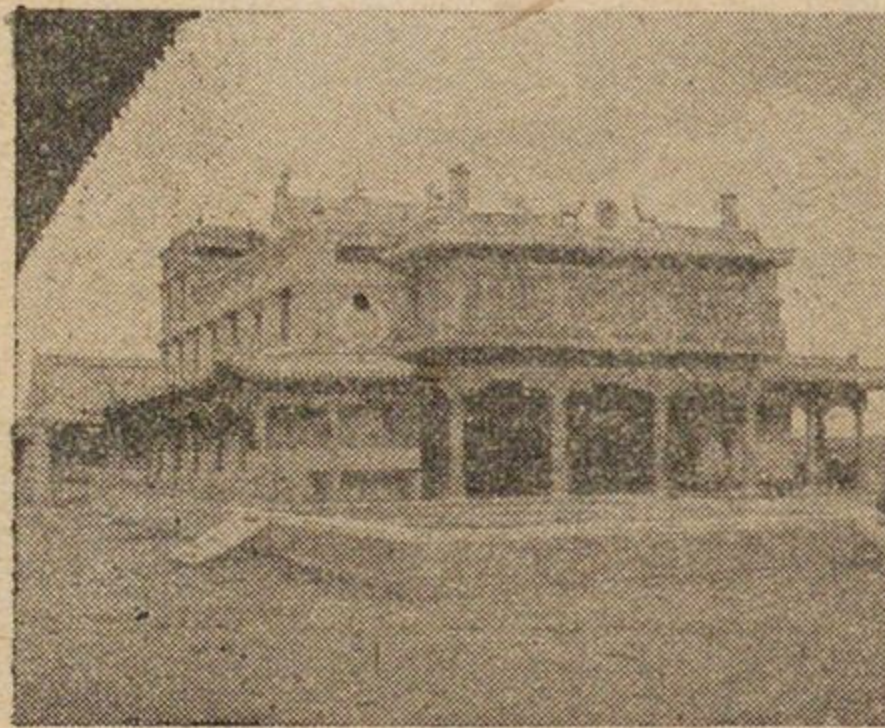
内容

シレート召—百靈廟—沙貝子王府

中西一介

八月の中頃でも薄氷が張ると云はれる蒙古旅行には、手袋まで用意しなくてもよいが、厚いスウエーターと薄い外套位は準備しなければいけないと注意されたが、峽谷の嶮路をトラックに搖られ厚和北方七〇粁の陰山山脈を越す頃から果して氣溫は急降下し、用意の毛皮の外套を着て居ても寒い程になつた。山頂には灰白色の岩肌に可愛い名も無い花が寒風に戰いてゐる。

谷間を縫つて約三十分の後、部落が見えた。漢人部落であることは泥家であることからそれと判る。部落を通り越して一と山越えると待望の蒙古平原が見え、遙かに地平線が霞んで一面の草原である●

遠くに見えた草原の青草は、近づいてみるとそれは凡て雜穀であつた。牧草かと思つたら實は粟であり、莜麥であり馬鈴薯であつた。丘陵の凹處凹處にはよくもこれ程あるものと驚く程漢人の住家が見える。牛車に收穫物を牽かせる農夫、路傍に子供の手をひく纏足の女、稔つた作物、なんら河北平原と變りが無い。かうした狀況は、武川縣城を通つて「シレート召」附近まで續いて居る。武川を過ぎると耕作の狀況も多少異つてゐる。なだらかな斜面にバリカンを入れた樣にあちこち荒廢地が出來てゐる。村が無いところを見ると春期移動農民が此の邊まで出掛けて來て播種が終ると又引き上げて行つたのであらう。畑の手入れは全然して

シレート召

だと云ふ極度の土地の搾取をやつてゐる。而も此の種の耕作地は無遠慮に凹地の牧草生長の最適地へ最適地へと進出し耕作の後は牧草も生えない荒廢地となつて屍を横たへてゐるのである。

一年にどの程度の速度で北進するのか解らないが、昔明朝嘉靖年間には漢人勢力が大同近郊までしか達してゐなかつたのが現在「シレート召」附近までは蒙古人の姿を見かけなくなつてゐる。武川縣城內に漢人數千を數へてゐるのに蒙古人は僅かに九名に過ぎないと云ふ事實からみても漢人の進出振りが想像出來る。果してこれだけの漢人の經濟的進出に對して蒙古人はおとなしく默認してゐるのであらうか、疑問無きを得ない次第である。

明史瓦剌傳に

宣德十一年、也先攻兀良哈遣使抵大同乞糧幷請見守備大監郭敬、帝敕敬、毋見毋予糧……也先大媿怒、十四年七月遂誘諸番、分道大擧入寇。

とある如く元朝百數十年中原を統治した蒙古人が植物性食物への依存性を强化し、粟、麥等を得んがため、來寇したことがしばしばであつたことがわかる。これだけ擴大された耕作地からの

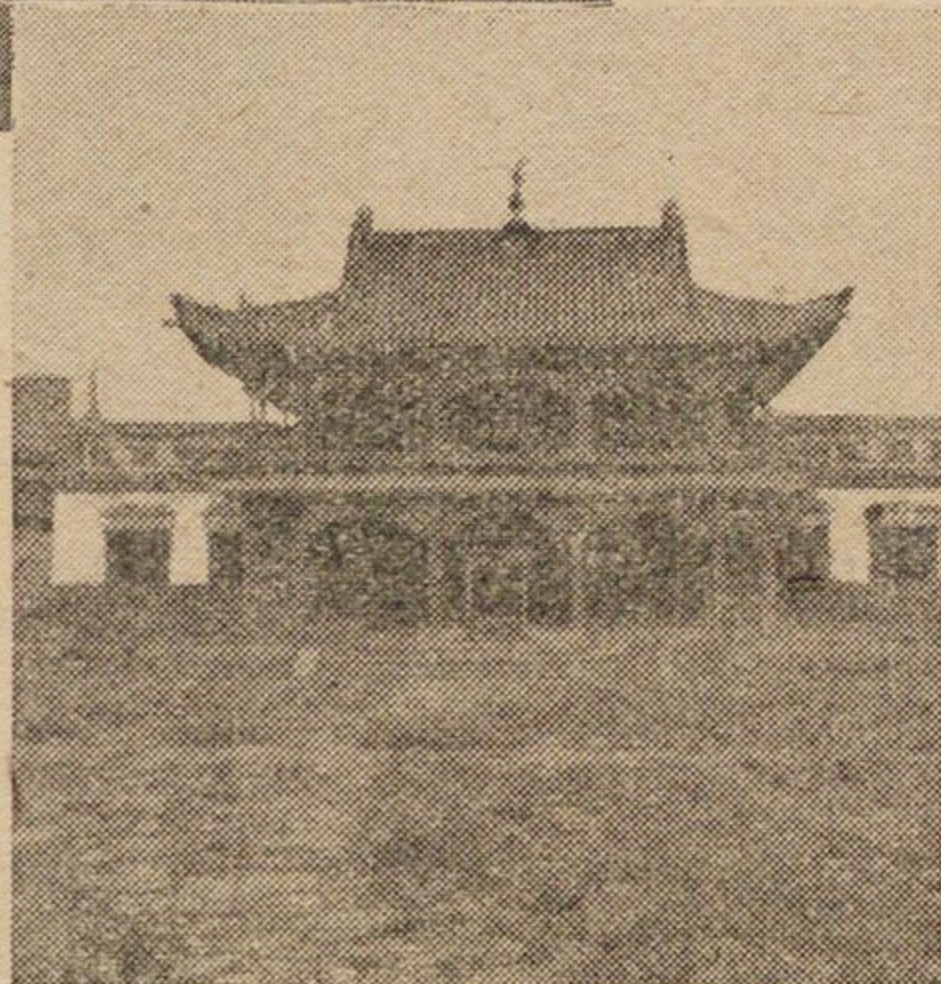
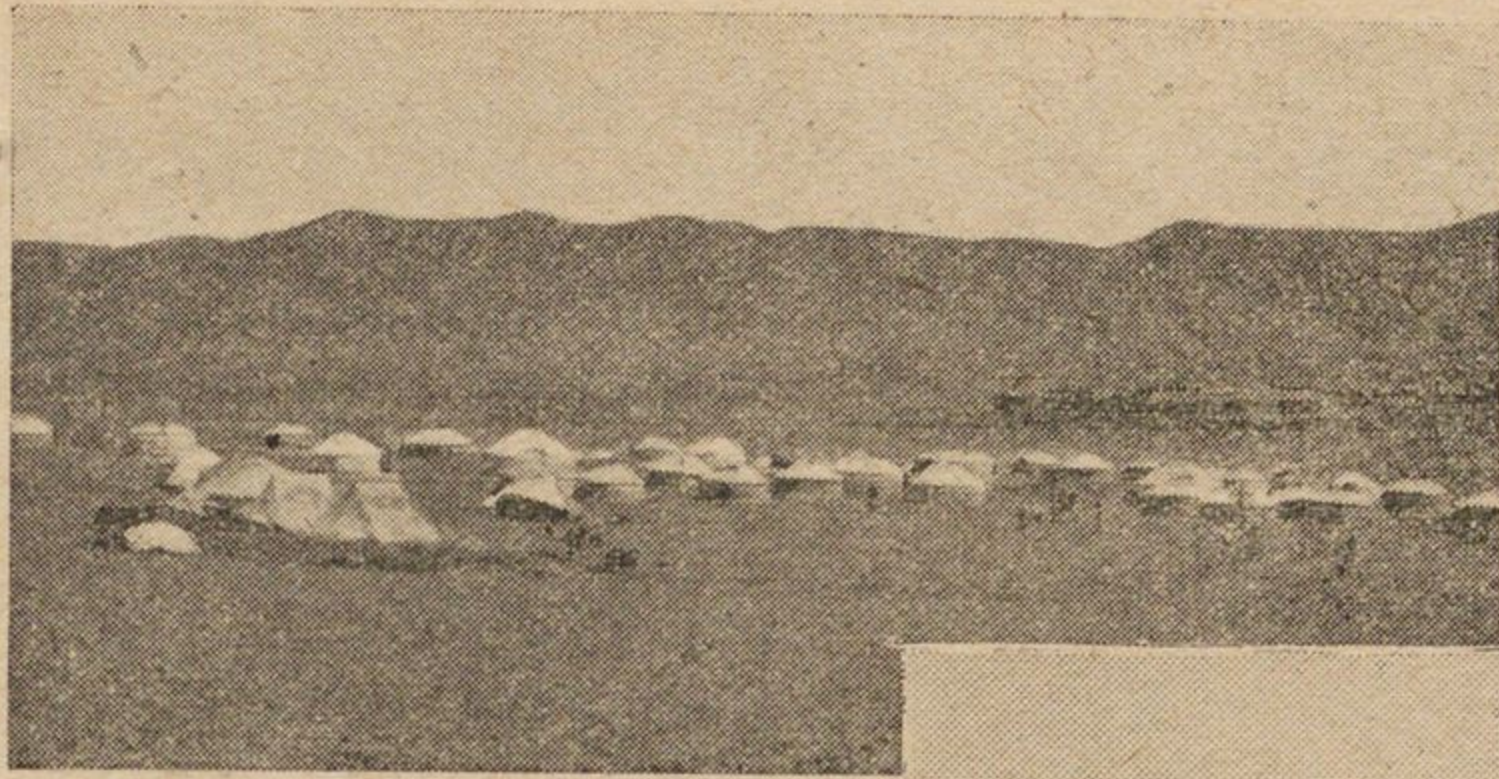
内容

收穫物が現在、他の地方に出廻り、蒙古人の手に充分渡らない事に果して蒙古人は滿足してゐるであらうか。

シレート召

『シレート召』何度聞いてもピンと來ない。全く蒙古の地名は六ケ敷しい。

（上）百靈廟附近ニ於ケル包ノ集團（下）百靈廟

武川から僅かの行程だが、蒙古草原に變り切つた小高い岡の上に支那式の喇嘛廟がある。これが「シレート召」なるものだ。車を降りて始めて烏蘭察布盟の盟長沙貝子が一行に加はつてゐることを知つた。少くとも烏盟を旅行するのに、そこの王様を連れて歩いてゐるといふことは大船に乗つた様なものである。

彼は角刈に口髭を生やし、大きな横皺が顔に深く刻まれて、忽必烈の再生といつた感じを受けた。堂々たる體軀にもの云はせて、大きく振舞ふところは實に立派な盟長の貫祿である。

廟の入口には噂に聞いた蒙古犬が三匹寢てゐた。盟長にくつついて這入ると、犬はだるさうに眼を開いたが一目我々を見て又目を閉ぢた。盟長のお蔭か或は噂程でも無いのか、併し何時猛然と躍りかかつて來ないとも限らない氣がして、イザと云ふ時には醫者も居ない蒙古の沙漠でのこと、全く心細くなつて首に卷いてゐた手拭をそつと腰にぶら下げた。

僧房に這入ると喇嘛は佛に供へた水やら香やら、はては鼻煙草の罎まで淸朝の禮法に倣つて次から次へと盟長に捧げて來た。盟長は之を受取つて水は額にぬり、香は顎の下を燻べる、其の間、口の中で念佛を誦へてゐるのであらう、口許をもぐもぐさせて居るが我我には何のことやら判らない。

終ると色々菓子を出した。燒餅、油炸果、餠々、完全に支那式の食べ物だが白い豆腐の様な「ウルム」（支那では奶皮子と云ひ、羊乳の上に張るクリーム製品）と羊乳茶は純然たる蒙古製品であつた。

「ウルム」はラクトーゲンの様な味がして實にうまかつた。が、蒙古の禮儀に反すると蒙古から摘み出され、折角の旅行も初めから挫折することになると思つて遠慮してゐたが、そこへ來合せた蒙古通に聞くと、遠慮は無用と云ふことが判つたのですぐピツチをあげて平らげてしまつた。皿が空になると又持つて來る。持つて來るとあける。あけると又持つて來る。實に都合のよい習慣だ。獨り悦に入つて食べてゐる中に動けない位食べてしまつた。滿腹すると今度は臭味が鼻について來る。羊臭くて堪らない。自業自得だ。

先年蒙古人一行が東京見物に出掛けた時、歡迎の席上で注がれるままに酒を飲んで全員醉つぱらつて始末がつかなかつたと云ふ話も、この習慣によるのだと聞かされて、自分も妙なところで蒙古通になつたものだと思つた。

盟長が一言「モルグチハイノ」と云つた。何のことだか解らないが、多分禮の言葉だらうと思つて自分も眞似てみたが舌がもつれてうまく出來なかつたが相手は笑つて頭を下げた。どうやら通じたのであらう。

百靈廟

シレート召から坦々たる草原を疾驅すること約二時間、漸く百靈廟に到着した。地圖では二重丸の印になつてゐるところだから少くとも小さな村の程度には包も集團してゐるだらうと思つてゐたが、來てみると荒野一片、烏蘭察布盟公署と云ふ堂々たる省公署にも匹敵するお役所が、野中の一軒家だ。土壁を繞らした中に三棟程家があつ

た。宿泊の準備がしてあるから隣の善隣協會へ行つてくれと云ふのだがこの隣なるものが一里も遠方だ。

この善隣協會に荷物を置いて、夕方廟を見に出掛けたが、これまた二里も離れた丘陵の斜面に在る。

かう云つた散在の狀況は、水を追ひ牧草を追うて轉々し、二つ三つづつ散在する包の存在狀況と類似してゐると思つた。要するにこの三箇所に分散してゐる幾棟かの人家並に庙が、地圖では二重丸で表はされた有名な百靈廟なのである。

廟は支那式の宮殿造りで眞ん中の二棟だけは丹青の色も鮮かに屋根の角にある金具も金色燦然としてはゐるが、八割までは破壞された神殿と僧房は廢墟以上の何物でも無い。綏東事件當時支那の軍隊が駐屯し、多越しの燃料が無かつたので木材といふ木材は殘らず燃して煖をとつたと云ふが、屋根は拔け、柱は拔かれ、倒れかかつた土壁の蔭に散亂する獸骨が陰慘味を添へ、夕陽に照し出された廢墟の姿は凄慘眼を披はしむるものがある。

醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人還口の中で繰返してみた。古戰場だ。綏東事件犧牲者の事が胸中を去來する。

此の崩れた土壁の中に喇嘛が住んでゐる。珍らしげに一行を見に出て來る喇嘛僧まで氣味惡いが、彼等の生活は面白い。土で出來た家は倉庫であつて庭にある包に寢起きしてゐる。だから家が破壞されて居ても一向痛痒を感じないわけだ。ばらりばらりとしか見當らないが、それでも三百近くの喇嘛僧が住んでゐるさうだ。

沙漠中のこの三百名の消費者に對する食糧は如何云ふ風に供給されてゐるだらうか。全く我々から考へると大問題のやうではあるが、實際彼等の間に於ては比較的圓滑に供給されてゐるらしい。羊や牛の骨が散亂し、化け物の様な頑强な體をして居るところを見ると充分その點が肯かれる。

沙貝子王府

湖風に吹きまくられた一夜を明して早朝盟長の王府を尋ねるため出發したが道案内をつけてゐたにも拘らず道を迷ひ、廣い涯しない草原をさ迷ふこと約五時間、午後三時に到つて漸く莞爾たる今様忽必烈の顔を見ることが出來た。十個ほど並んでゐる包の中央の最大の包の中に案内されたが、厚い汚れた「フェルト」製のお碗を伏せた様な包の中は眼の覺めるやうに飾り立てられてゐる。朱色に塗つた包の柱、眞ん中に切つた眞鍮の圍爐、柱の色にマッチした朱色の茶棚、ずらりと並べられた銀器磁器、佛具の數々、あちこちから獻納されたであらう種々雜多な時計など、流石に、王爺の包は豪華を極めてゐる。並べられた寫眞の中に、日本の藝妓や山田五十鈴などのプロマイドが混つてゐるのが、特に我々の眼をひく。

地面には牛皮、フェルトを敷き詰めた上に絨毯と來てゐる。豪華な點に於ては一驚を吃するが、彼等の生活內容が完全に漢人に依存してゐる點に於て特に興味深いものがある。

身につけるものなどに到つては、頭の先から足の尖まで何一つ彼等自身の手で製造するものはなく、徹底した漢人依存である。極言すれば蒙古人は馬に乘つて家畜を追ひ廻し、王侯は坐食し、坊主はお經を誦んでゐる以外何んにもしてゐないのだ。

この原始的特殊生產、僧侶王侯に對する奉仕の過重、生產必要地の漢民族農耕地區北進に依る喪失、生活上の漢人依存に結果する漢人との間の生產物の不等價交換が、蒙古民族の明日を運命づけてゐる決定的要因であらう。

（筆者は在北京、日本大使館書記生）

愛路厚生船の話

加藤福次

北支河川沿岸の治安宣撫を目的として愛路厚生船がデビューする様になつた事は、支那三千年來の河川史に輝く壯擧である。凡そ鐵道や自動車といふ文化的交通機關の通じてゐない內河川沿岸の住民にとつてかうした慰安福祉が天來の使節の如く訪れた事は嘗てなかつたことであらう。

本年七月、時局を反映して華北の內河航運業は完全に華北交通會社の麾下に高度統制を見、その近代的運營への促進によつて沿岸住民の交通が極めて安全迅速に正確に行はれ、これがため治安及び産業開發が促進されつつあるが、此の運輸開拓の礎石となつて日華の軍官民が渾然一體となつて共榮樂土の建設にひたむきの努力を拂つていられる勞苦と成果に答へるために、華北交通會社が廉賣品、慰問品、演藝、施療、施藥を滿載した所謂興亞のショーボートを派遣した。これが愛路厚生船の目的である。

斯の如く厚生船は華北三千五百粁の黃土を拓いて流るる河川沿岸の日華の軍官及び良民慰安宣撫を目的とするために住民にとつては遠い文化の國からの寶船であり救助船であり、聖代の女神船でもある。そしてこの船に對する民衆の歡喜感謝感激こそは日華親善の心の結びとなり軈ては此の河川の四季を通じての最も樂しい河祭とさへなつて來るであらう。

東亞大陸の河川にかうした美しい愛路厚生船の始めて出現する様になつたのは昭和九年の夏、北滿松花江に鐵道總局が汽船三江號を浮べたのに始まるのであるが、其の後治安良好となるに從ひ之を延長してソ滿國境の黑龍江に浮べ、北は漠河の果より呼瑪、黑河、富錦に至る國境一千粁の間を長期間に亙つて盛大に擧行し、對岸ソ聯側を啞然たらしめ、住民の垂涎千丈たらしめた。爾來數年を出ずして北支主要河川に此の水の女王船を浮べ流域四千萬の民衆へ興亞の黎明、民族協和を實踐によつて呼びかけ得る事は聖代に於ける吾等民族の光輝ある歴史でなくて何であらう。

華北交通會社の統制運營の主要河川は灤河、東北河、北運河、南運河、大淸河、子牙河、小淸河、黃河、鹽運河大運河等であるが、之等の流域は北支二百五十七縣に及び其の人口四千三百萬人と概算せられてゐる。本年はこれ等全河川に實施することは出來得ず、甚だ遺憾であるが南運河にあつては八月十二日より同月卅一日まで二十日間沿岸各都邑の慰安を終へたのであるが其の主要都市は、大紅橋、教場、楊柳青、靜海、獨流、陳官屯、唐官屯、青縣、興濟、泊頭、南霞口、東光、連鎭安陵、桑園、老金灘、德縣の十七箇所であつたが何れも新民會、縣公署、青年團、自警團、愛路村民、小學校生徒等の熱狂的歡迎を受けて演藝、廉賣、施療班ともに到る處で多大の效果を擧げたのであるが此の十七箇所に於て集合した民衆の數は約二十萬、映畫演藝を觀賞した者十一萬五千、廉賣品賣上げ高四萬三千圓、施療施藥を受けた員數二千人に達したのである。尙大淸河の厚生船は九月六日天津發十七日保定着の豫定であるが、本河川の寄港地は臺頭、勝芳、蘇橋、新鎭、趙北口、新安、安新、東安、保定の豫定である。

左に南運河に於ける厚生船の盛況を毎日新聞の記事に依りて其の一端を紹介することとする。

厚生船の出發

東方の秩序あらたに昭明の日を來すもの——勇ましい唄聲が黃色の濁水にこだまして、南運河を溯る興亞のショウボート、華北交通會社が最初の企てである愛路厚生船は華北三千五百キロの黃土をひらいて流れる內河川の川筋に、日華の軍官民が渾然一體となつて第二次治安强化運動に『われらこぞり立ちて共榮の樂土をなさむ』との勞苦と成果に答へて慰問物資の廉賣、施療と施藥などを六隻の大ハシケに滿載して、二隻の機械船が之を曳き、まづ天津鐵路局をふり出しに八月十二日あさ天津金綱橋を出帆した。この大陸の寶船は九十餘名の乘組員が揚る東亞の船唄を奏でながら、歷史的壯途に就いたのであつた。

船行中の光景

日の丸を先頭に、華北交通の車輪旗と五色旗とを交叉した萬國旗に飾られた二つ編成の厚生船團が推進機の音も爽かに興亞行進曲を奏でながらいま進んでゆく。「愛路厚生船來了」と遠く

遙かな畑を横切つて駈けつけて來る農民、川の民、群がる女と子供たちで忽ち川幅十間に足りぬ兩岸の堤防をうづめる。水路を渡る皇軍勇士らの陽にやけた朗らかな顏も交る。出發に際して北支水路警備隊森岡部隊長が赧顏をほころばして語つた數々の警備苦心談が今更思ひ出される、川をはさんだ小さな碼頭にまつ黒な顏がドツとあげる歡聲、厚生船は彼等の何時の祭よりも賑やかな歡呼に船着場に横づけたのだ。

船着場の歡迎

鉦と太鼓の賑やかな音が、碼頭に流れ數百名の愛路少年隊が先頭になつて手に手に五色旗と車輪旗、それに『愛護村』と認められた小旗を打ちふりながら、厚生船を出迎へる。その中央に假裝したグロテスクな一團がある。大きなお面をすつぽり冠り、僧形の面を中心に老婆、翁、娘が手振足拍子面白く踊つてゐる、そして僧がときどきくりひろげる卷物には「厚生船歡迎」「建設東亞新秩序」「强化治安」「一人愛路同享幸福」などと記され、揚げられる度に萬雷の様な拍手が捲き起る。此の少年達は鐵道に於ける愛護村愛路少年隊と同様に各河川にこの厚生船運航を契機として强化されたもので愛護村水路少年隊の可愛らしい興亞の同志たちであるのだ。

厚生船の代表者が挨拶をすますと、もう待ち切れないやうに設けられた廉賣所や施療所にひしめき合つて歡聲があがる。藥罐、茶碗、洗面器……その一つ一つに『アイヤー、價錢便宜了（チアチエンピエンイーラ）』と夢中になつて廉賣場の棚に人波をかきわけて來る太太（タイタイ）。買つた石鹸を嬉しさうに手にして人ごみの中から汗ばんだ白粉氣の無い顏を出す姑娘、獅子牙粉を母親から持たされてニコニコしてゐる小孩。麵粉を買つて眉も頰も白くした船頭さんの笑顏……黄色地に墨で愛護村と染めつけられた旗が紺碧の空にはためく、細長い碼頭一面に繰り展げられたアンペラ掛け小屋の厚生廉賣場に描き出された明朗風景である。

食料品、世帶雜品、諸雜貨、身廻り品、吳服類等、一面に並べられた商品に蟻のやうに取り付いてゆく民衆『一番よく賣れるのは洗面器、それから食料品では醬油と鹽で、お砂糖は時節柄相當な苦心をして用意して來たのですがこれはあまり賣れないやうです。川筋は日頃品物を買ふのに非常な不便をしてゐるのと、遠く天津、北京方面から運び込まれる關係上、隨分高價であるらしくそのため面喰ふやうな忙しさですよ。何しろ出發以來既に十日間、一日平均二千圓を越す賣れ行きです。兵隊さんは何よりも菓子とビールを買つて行かれるやうです。川筋といふ感じの最も强いのは、ゴム底の布靴が人氣を呼んで居ることです』とは廉賣班の主任さんの話である。

施療班大童の活躍

なかば希望を失つた顏、新らしい光明を求める顏、泥と襤褸にまみれた河の民がひしめきならぶ、天津をはなる僅かに二十數粁の地に見る文化の惠みうすい顏、顏、顏である。うら若い娘が信賴しきつた半裸の姿で厚生船施療班の醫師にまかせて診察を受けてゐる。他の一隅では四十歲ぐらゐの船頭が一年以來はり通した眞黒な厚ぼつたい膏藥をはがされ、まつ白なガーゼでその肌が淸潔に洗ひ出された上に、新らしい塗布藥が施される『三日もするとよくなりますよ』と醫師から親切に言はれ、黒い顏をほころばす。

八年來惱み通したマラリヤ患者が注射を受けてゐる。アミーバ赤痢だと診斷された船頭のおかみさんが何のことかさつぱり判らないながらも藥を貰つて『これをのめば治るのだ』といふ純朴な感謝と安心の感情を浮べて歸つてゆく。

演藝に歡喜、爆笑

北京からわざわざ招かれて乘り込んだ中國人の手品師、曲藝師が賑やかな伴奏で面白をかしく繰り展げてゆく祕藝、珍藝の數々、良民のあげる絶讃の聲と爆笑、手拍子、足拍子をとつていまにも踊り出しさうな觀衆だ。

いよいよ日本舞踊がはじまり、兵隊さんたちの拍手に迎へられ舞臺に立つた四人の乙女たちは、流れる汗も拭はず滿洲娘、愛染かつら、をしどり道中はては興亞音頭と花やかな手振り足拍子には、全く暮れた秋空に美しい月が輝き、やがて映畫がはじめられるのである。月光に照らし出された觀衆は兩岸の堤を埋め、ひしめいてゐる。日本ニユース、華北電影ニユース、滿映ニユースに續いて觀光日本の美しい景色が觀衆を魅了してゆく。漁業日本にあがる讃嘆の聲、體育日本に見る力强い皇軍青少年の姿は、いたく勇士を朗かにする。電燈のない村に初めて映畫を見たであらう良民たち、久し振りに慰問を受けた皇軍勇士たちは、厚生船に深い感謝をして家路に歸つてゆく。

（筆者は華北交通會社水運局員）

北京 秋の感覺

佐藤俊子

まだまだ暑い日が續いてゐる夏の間に、ふと秋を感じる瞬間がある。『秋來ぬと目にはさやかに見えねども――』と云ふ日本の古歌は、この目に見えない秋が風の音から感じられることを詠んだものだが、北京のやうな樹木の多い都會に住むと、葉の繁みのふとした動きから、秋の觸感を思ひがけなく感じさせられることがある。槐樹に蟬が鳴き、簾子の蔭に居ても汗がしつとりとにじんでゐるやうな時に、風の音とも物の搖ぎとも分らぬ、ほんの僅の氣象の微動が、烈日の隙間からひそかに秋をささやくのである。

この感覺は一瞬で、又忽ち眞夏の空氣の中に消え去つてしまふ。

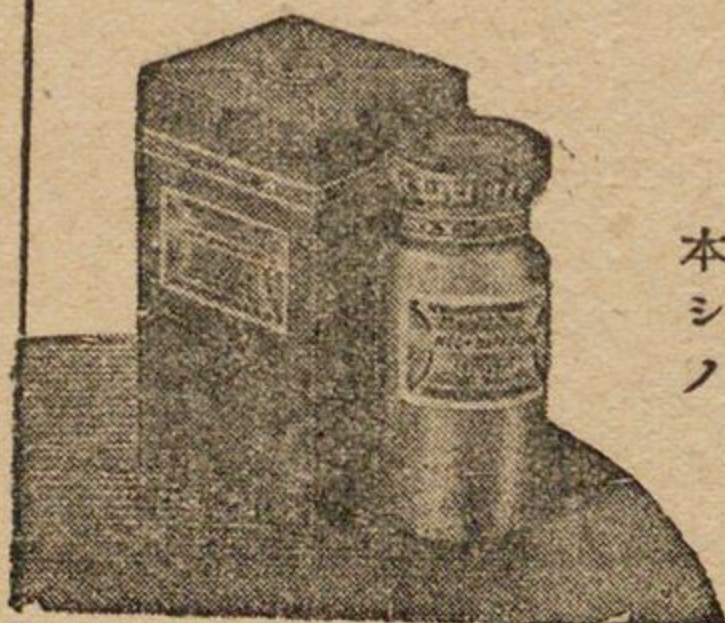
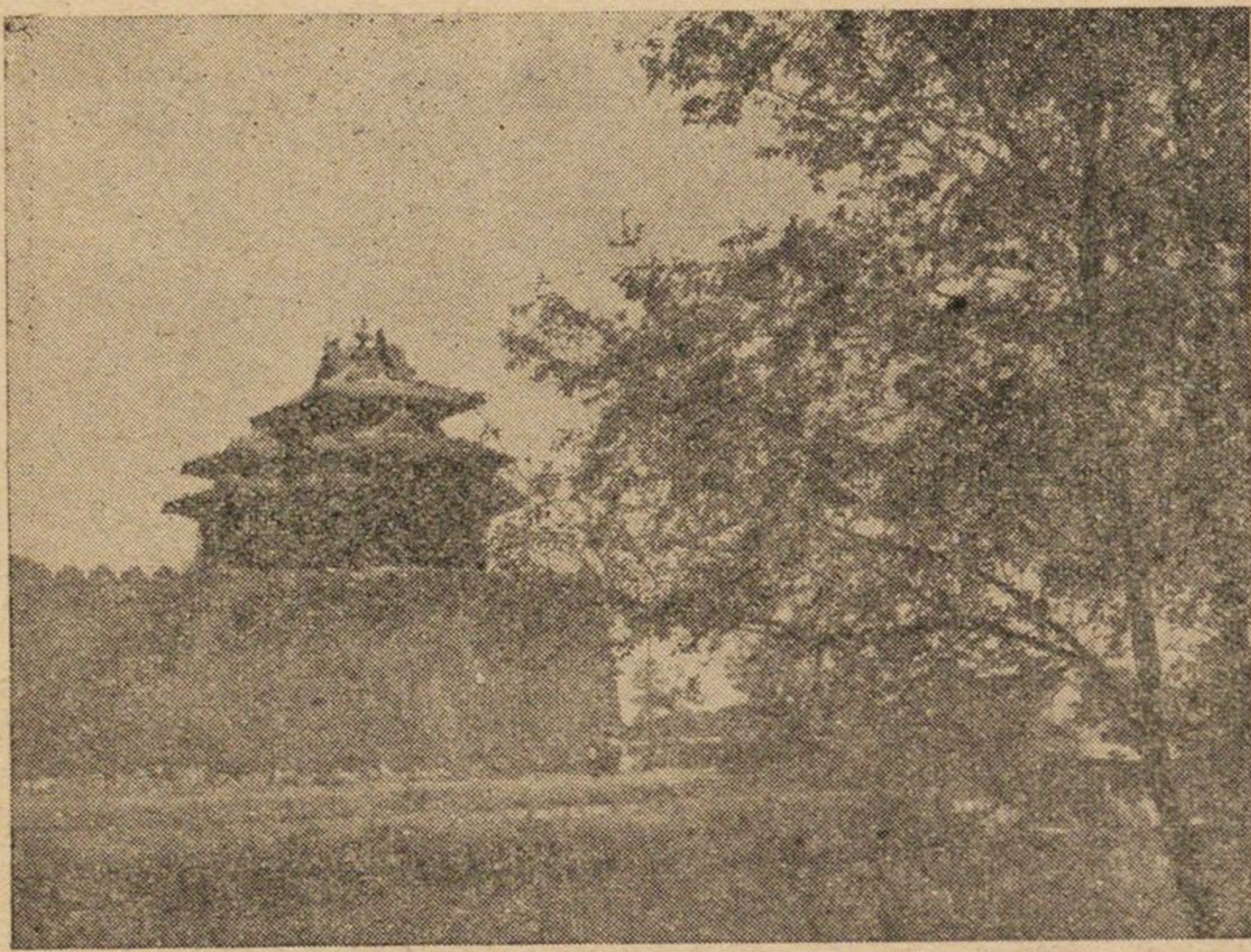
だがこの感覺はなつかしいものである。秋のひそかな前觸れにつづいて、やがて或る日の雨が、ほんたうに秋を持つてくる。院子の雁來紅が雨に仆れ濡れた木の葉にしめじめした變化がくる。蕭條としたおもむきが一夜の内に院子に作られ、夏を飾つた草木がこの雨でおのづから整理される。そして秋は、見る間に深くなつてゆく。

郁達夫の書いたものの中に十數年前に北京を訪れた時の短かな半紀行、半創作のやうな短文があるが、恰度これが秋の季節で、朝陽門外の運河の流れの兩岸に楊柳が垂れ、太陽は西に落ちようとして、人の少ない渡船がこの河流を滑つてくるあたりの風景が描かれてゐる。これを讀んでゐると、北京の秋の美しい寂しさが、既に秋のかげを帶びた楊柳の水中に映る姿からしみじみと身に迫つてくる。

秋ばかりではない。春の風景にも水の流れは情趣をもたらすものだが、現在の北京には、湖水の水はあつても河流がないので、この風景を傷つけることは惜しいが、以前には運河があつたのでこの溢れるやうな情趣を流水から掬みとることができた。この運河には渡船の便があり、船の中には客を倦ましめないやうに講談師などが乘つてゐたさうだが、この趣きは春には一層の長閑さを添へ、秋には又一層の寂びを添へたに違ひないと思ふ。

秋の風情を樂しむには、私は太廟がいちばん好きである。裏の堀を前にして城壁の一部を遙に眺めてゐると、壁の上から見える灌木の葉が、水色の空の中でリズムを刻んで右に動き左に搖れてゐる。秋の光りを水にして、其の中で木の葉は巧みに秋の風を描くのである。秋の風でなければ、あのやうな木の葉の動きかたはしないものだ。と然う思ふ。そして北京の秋をこの木の葉の動きに集中して、空に描かれた秋の風をしみじみと味ふのである。

太廟の沈んだ、おちついた秋氣と異つて、紫金城内には絢爛の色を剝がれた悲哀の秋氣がある。太廟は寂寞とした秋のこころを胸に抱いて、靜に人生を觀じさせるやうな瞑想の時間を與へてくれるけれども、紫金城内を歩いてゐると、何となく「秋、落莫――」の情思が、既に返らぬ夢を再び追ふやうな、盡きぬ名殘りの切ない秋のこころを感じさせるのである。ここには美しい廢墟があるからであらう。

私は秋に紫金城内の一部を見て歩いたとき、黃金いろの瓦のいろが、秋の碧りの空に實によく調和してゐるのにおどろいたことがあつた。これは色の感覺であるが、この豪華な黃金いろの瓦の波の間に、稍〻枯れかけた夏草がのびてゐる。そしてところどころに見

えるこの夏草に、秋の風が吹いてゐるのである。紫金城が皇城であつた頃には、黄金いろの瓦の波の間から夏草の生ひ繁るいとまはなかつたであらう。
　この華麗な屋根瓦にのびる夏草にも廢墟[illegible]美しい悲哀がある。秋になればこの悲哀が秋の碧りの空に反映するのである。黄金いろの瓦の色と、秋の空の色の調和は、色彩の調和の感覺ばかりではないのである。
　去年のいまごろであつた。周作人先生に紹介して欲しいと云ふ慶應の學生に頼まれて、二人の青年を伴つて、周先生のお宅に伺つたことがあつたが、その時、學生たちが先生に何か書いていただきたいと所望した。快諾された先生がこの時私にも色紙に自書されたものを共に贈られたがそれは李白の詞を寫されたもので、寫李白詞應と附記して

平林漠々烟如
織　寒山一帶
傷心碧　暝色
入高樓有人
樓上愁　闌干
空佇立　宿鳥
歸飛急　何處
是歸程　長亭
更短亭

と云ふ詩が書かれてあつた。先生の字は、恰度周先生の人格に見るやうな素朴な、雅味に富んだ、そして力のこもる立派な書體だが、これに淡藍色の遠山に薄茶色の霞、薄綠りの秋草、水色の流れを刷つた優美な色紙が用ひてあつた。この色紙の模樣に周先生の字體と李白の詩のこころが、柔らかに調和してゐるやうに思はれて、これを贈つていただいた時、この一葉の色紙の上にどのやうにこの世の秋をなつかしんだか。感傷的ではあるが、淡々と秋の一つの情景をとらへて、樓上のおばしまにただ一人立つ詩中の人の上にさまざまな空想を寄せ、歸りを急ぐ鳥たちの上にまで美しい秋を感じた。
　仲秋節を三旬の後にひかへて、北京はもう晩秋である。風の吹く毎に落葉殖え、夜氣は肌に冷めたさを增してゆく。秋もこのやうに終りに近づくと、その感覺も失ひ勝ちで、やがて來る多へと何か思ひを急がれ、細々と鳴いてゐる蟲の音にも寒さの韻律が伴ふばかりである。私の最も好む木の葉の黄色も、鮮さを失つた。北京には紅葉はないが、黄葉の滴るやうな濃い、こつくりとした豐かな鬱金いろを展々樹木の葉から見出だして、その色の美しさに足をとめることがある。だが長安街の立並ぶ樹々の間から、銀杏の葉の黄葉を樂しむ魅力の秋はもう疾くに過ぎてしまつた。

（筆者は作家）

太廟より角樓を望む

——敗軍の將——
陳濟棠

　會ては廣東の軍政を掌握した將軍……陳濟棠が、近ごろ重慶を脫出して香港に潜伏して居ると云ふことです。
　四六時中、日本軍の適確なる空襲下にある重慶で、二年間の永い間の穴居生活は、彼を失明に近いトリメにしたのです。
　彼がトリメになる位だから……いはんや重慶の一般市民は榮養不足で如何に健康が低下してゐるか……と云ふ事が想像されます。
　臨戰体制下の今日、われ〳〵は榮養の充實、特にビタミンADの補給に注意すべきで……それにはビタミンADを濃厚に含有した小豆大の糖衣粒ハリバの連用が最も効果的です。
　一日僅か二粒で足り……戰時に多い視力の低下をふせぎ、病氣に對する強い防衛力が培はれます。
　ハリバで体内に充分なビタミンADを補給すると……皮膚や呼吸器粘膜の防壁を强化し、病菌や病虫に負けぬ強い抵抗力を培ひ……体力を創るに充分な活力榮養源であるからです。

京戯

「打魚殺家」に就て

……筋……觀法……諷刺的内容等……

石原巖徹

京戯「打魚殺家」は俗稱である。正式の劇名は「慶頂珠」と云ふ。慶頂珠の劇名の起りは、次に述べる通り、結婚の贈物の名を取つたものである。俗稱の「打魚」は魚を捕ること、つまり漁業である。「殺家」は一家を殺すこと、日本の俠客の「なぐりこみ」と同じ行爲である。「打魚殺家」はさしづめ「魚を捕つてなぐりこみをかける」といふことになるが、それでは完全にこの劇の内容を説明したことにならない。結局これは「魚を捕つたり、なぐりこみをかけたり」と云ふ意味で、この劇の内容から大衆の眼に最も印象の深い[illegible]魚と殺家との二つの事件を摘出して劇名としたものと思はれる。これと同じやうな俗稱のつけかたは「瓊林宴」といふ劇に對して「打棍出箱」といふのがある。恐らくこれらは無學文盲の者に對して解り易くするために附けられた俗稱であらう。

この劇の略筋は次の通りである。

水滸傳といふ小説の物語の後日譚の一つ。梁山泊の豪傑の内、水上出身の阮小五は、首領宋江等が宋の政府に歸順して一黨が解散した後、歸順を欲せずして田舍に歸り、一人娘の桂英を相手に川の魚を捕つて生活してゐた。娘の桂英は同じく梁山泊の豪傑の一人花榮の息子に嫁にやることになり、花榮の方から慶頂珠といふ寶物を定婚の印に贈つた。以上は前提で劇には無い。

劇は先づ梁山泊の豪傑混江龍李俊とその友の捲毛虎倪榮の二人が、河邊を散歩するところから始まる。なほ劇では阮小五は蕭恩といふ名にしてある。次に蕭恩父娘が網を打つて漁をする、漁を終つて休んでゐる處へ右の李、倪二人が通りかかり蕭と李は舊同志なので、蕭の舟に二人を招き、酒を出して歡談する。そこへ土地の豪族丁家の者が蕭を尋ねて來て、漁業税を出せといふ。不漁で錢が上らないから又この次にしてくれと斷わる。李、倪の二人はその税金に不審を抱き使の者を呼び止めて、それには朝廷の命令でもあるかと問ふと、そんなものは無い、ただ縣長の命令だと云ふ。それは不屆だから免除しろ、免除しなければ俺達に考があると云つたと歸つて報告しろと怒鳴りつける。蕭は二人をなだめて餘り亂暴なことを云ふなと頼む。隱退した彼としてはなるべく穩便に世を渡りたいからだ。二人はこんな稼業をして税金まで取られてはつまらんから止めてしまへと勸める。止めると生活に困るといふと、食ひ扶持は二人で何とかすると友情を見せる。やがて二人は歸つて行き蕭父娘も舟をしまつて家に歸る。一方丁家の使の者は歸つて行つて主人にこの事を報告する。そこで翌朝用心棒の武術教師を呼出し、腕づくで税金を取つて來るやうに命ずる。教師は弟子共を引連れて蕭の家に行く。

蕭の家では朝になつて父娘が話をしてゐるところへ、用心棒氏(教師)がやつて來て門を叩く。蕭が出て應對すると、税金の話なので昨日の通りを答へると、教師は俺が來た以上そんなゴマカシは通用せぬ。どうしても出さなければ首に鎖をつけて蕭を引つぱつて行くと言ふ。そこで爭ひとなるが、老いたりと雖も梁山泊の豪傑阮小五の蕭恩、到底土豪の用心棒如きの手にはおへず散々に打ち負かされて逃げ歸る。

蕭はこの事を申し開きするために縣長の處へ出頭すると、縣長はウムを言はせず彼を捕へて、四十ほど笞打ちの刑を施し、なほ丁家に行つて謝まることを命ずる(この縣長の處へ行く場面は娘との會話及び唱の中で説明する)

縣長から不當の暴刑を受けて家に歸つた蕭恩は、穩便に世の中を渡るといふ志もこれでは到底守れないと痛憤しその夜、丁府の一家をみなごろしにしてやると刀を持つて出かける。娘には留守番をしろといつたが、娘も一緒に行くと云ふので、父娘して舟に乘り暗中川を渡つて丁府に赴き、謝まりに來たと詐つて主人に面會し、慶頂珠を獻上すると云つて油斷させ、先づ主人を殺し、續いて教師をはじめ一族郎黨全部を父娘でかたづけてしまふ。

この劇は蕭恩が主役で、これに扮する俳優は老生と云ふ役柄である。唱と白(せりふ)と所作の三つを重んずる。次は娘が重要な役で、これに扮する者は青衣(正旦)といふ善良な女の役柄である。唱を重んじ、又美人でなければならぬ。第三に重要なのは用心棒の武術教師で、これは丑といふ道化役の俳優が扮する。口が達者で輕妙なせりふにより客を笑はせなければならない。その他は端役であつて大して重要でないが、倪榮に扮するのは花臉(淨)といふ顔に隈取を施す役で、豪快な音聲を發しなければならぬ。

この劇の觀どころ(或は聽きどころ)

第一書房
戰時體制版

東京市麹町區三番町
振替東京大四二二三
電話九段(33)三一四一五三三四四

各七十八錢

ゲッベルス
勝利の日記

飜譯權所有　佐々木能理男譯
初刷五萬部 忽ち賣切れ!!
二刷三萬部增刷出來!!

ナチスは何故勝つたか？その不屈な民族精神は如何にして高潮されたか!?宣傳は眼に見えない武器である。ナチスの强力宣傳の大立物ゲッベルスとは如何なる人物か!?彼の生活は!?本書はまさにかかる世界の疑惑に答へるものである。

ナチス宣傳相として世界にその名を轟かせるゲッベルスの建設闘爭記!!新しきドイツは如何にして今日の勝利を戰ひ取つたか

室伏高信譯
ヒットラア **我が闘爭**
第十五刷二萬部出來!!

第一書房戰時體制版　各七十八錢

弓館芳夫譯　五刷二萬部

西遊記

奇想奔放にして、さながら天馬空を往くが如し、凡ゆる形容詞を絶したユウモア!! 支那にして初めて生れ出たるユニツクな東洋文學の王座!!

『千夜一夜』の魔術師も兜を脱がずにはをられない孫悟空の活躍の面白さ!! 萬里の長城や大同の石佛と共に、支那が我々を驚かせる小説はこれだ。『西遊記』を讀むと人間の世界が小さく見え、笑ひのなかに人生を達觀することが出來る。而も一度讀み出したら面白くて止められない品切れの所增刷!!

文學博士 佐佐木信綱謹註

明治天皇御集謹解

御集の全謹解一千七百八十七首をおさむ

杉浦重剛謹撰

選集 倫理御進講草案

本書に對する國民的感激は愈々高まる!!

法學博士 大川周明著

新訂 日本二千六百年史

廿五刷三萬部 總數三十八萬八千部突破!!

上村忠治著　初刷三萬部發賣中

詩人を通じての支那文化

陶淵明・李白・白樂天・杜甫の五大詩人の作品を通じて支那を研究せる異色篇!!

三井光彌著　初刷三萬部發賣中

父親としてのゲーテ

ゲーテの人間性の中核を突かんと試みる最初の文獻であり父性愛の研究である!!

東京市麹町區三番町
振替東京六四二二三

一、最初蕭恩父娘が舟で網を打つところ、二人の唱が聽きもの

二、蕭恩が朝起きて娘と語るところこの場面の蕭の唱「昨夜晚・吃酒醉……」はこの劇の代表的歌曲でレコードなどにも吹込まれてゐるし、普通餘興などに「打魚殺家」を唱ふと云へばこの一節である

三、用心棒の武術敎師と蕭恩との爭ひの場、これは蕭の武勇を强調するために敎師を極端に弱い口先ばかりの男とし、それを道化的演出に依つて表現する。この場面は相當に長く殆ど全劇の二分の一以上を占め、全くの喜劇である。ためにこの劇の筋が、本來ならばかなり深刻な社會劇的性質のものであるに拘らず觀衆に對して朗らかな武勇傳の如き感じを與へてゐる。

四、蕭父娘がいよいよなぐりこみに行くといふ前。痛憤の極、折角カタギになつたのに又もとの如く暴力行使に出なければならなくなつた豪傑漢の惱みを表現する、悲壯な場面である。（なほなぐりこみの場面は普通大して重視されないが武劇の心得のある俳優例へば李少春の如き場合には、ここで敎師等と立廻りを見せることがある）

この劇の物語は「後水滸傳」といふ水滸傳後日譚から出たもので、水滸傳と同じく社會的政治的諷刺が含まれてゐる。その骨子は、梁山泊の豪傑が折角やくざ稼業の非を悟つて、良民として穩便に世を渡らうとしてゐたのに、封建政治の餘弊として土豪劣紳が貪官と結託して良民を苛斂誅求し、天子の聰明を蔽ふといふ所業が依然絕えないので、氣概ある豪傑漢としてはこれに耐へ得ない。そこでやむなく又もとの梁山泊時代のやうな暴力に依る惡政反抗の手段に出ねばならなかつた、といふ點にある。梁山泊の一黨が結成された動機は、大抵社會惡か、或は惡政に對する反抗的行爲に依て、正業を續けられなくなり、エエままよとばかりやくざ稼業に身を落した連中が、同氣相求めて集團の力に依り運命を開拓せんとしたところにある。從つてこの劇に語られたところは、一たん梁山泊の首領宋江等が歸順し、政府側が非を改めることになつたとしても、結局かうした惡弊は根絕されるものでなく、依然貪官汚吏や土豪劣紳の跋扈は續くといふことである。

又もう一つこの劇に依つて知られることは、稅金取立の請負制度といふ支那の傳說的惡政である。卽ち豪紳丁某は縣長から漁稅の徵收を請負つてゐたので無理にも負擔力の無い者から稅金を取立てるといふ暴政を敢てした。

稅金請負制度の惡政たる理由は、恰も保險代理店の如く手數料の儲けを請負者に與へるところから、請負者は商賣として極めて熱心にその徵收を行ひ且つ官憲の力を背景として人民に對し壓迫的態度に出るので、政府に對する人民の怨嗟は政府が直接に稅金を取立てる場合以上に甚しい。のみならず多くの場合、人民は稅率などの詳細を知る方法が無いから、請負者は勝手な稅率で取り立てて、政府へは何とかゴマかして少く納め、その間に不當利得を占める。又さうしたボロイ商賣であるから、その特權を得るためには、官憲に對して種々な運動が行はれ、官吏の綱紀を紊るといふ重大な問題がある。

かくの如くこの劇は相當深刻な社會諷刺が織込まれてゐるのであるが、演出法を見ると、その點は非常にボカしてあつて、觀衆は、蕭恩に扮する老生の唱と、娘に扮する女形（青衣）の美貌と唱、及び敎師に扮する丑の「笑ひ」だけをたんのうするやうになつてゐる。かうした點はすべての京戲に共通するものであつて、ひとり「打魚殺家」だけではない。京戲を脚本だけ見たのではそれが支那人に喜ばれる理由が解らないと同時に京戲の觀賞に於て筋が殆ど問題でないといふのはそこである。

中國店舗の特殊性

山崎　勉

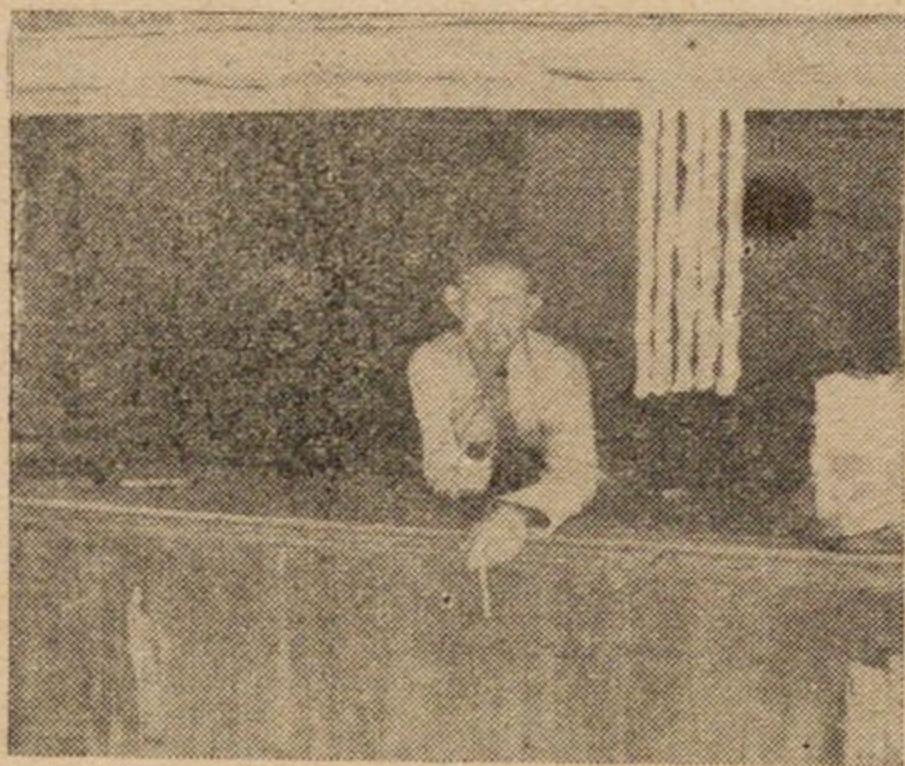
中國店舗の特殊性としては、その看板の立派さに比して店舗そのものの餘りにも貧弱であることでもなければ又商品排列の亂雜なことでもない。

店の内部を見ると、入口に面して顧客の進入を防止するかの如く、丁度バーのスタンドかおでんやの板臺めいたものがあることである。

これを櫃臺（クイタイ）と云ふが、これこそ、中國店舗の構造を特色づけるものであり、中國の社會を歴史づけるものであると云つても敢て過言でないと思ふ。

これに就て支那研究叢書第三卷（大正七年發行、東亞實進社）には次の樣に説明してゐる。

櫃臺は幅二尺高さ三尺五寸乃至四尺以上に達す。錢莊、當舗（筆者註―質屋の意）のものは、一般に高し。（金錢出納を本業とする故なり）上面は麗はしき木理を有する厚板を以てし、外部側面は板張りにて、内面には棚引出しを設く。通例、店の二面、來客に對して曲尺形に設置せられ、我が銀行等の勘定臺の如きものなり。想ふに支那は貨幣制を欠ける結果、其の受入に際し常に純分量の鑑定を必要とし、然らざるも、一々之を投じ、其の音色によりて良否を確めたる上にあらざれば納めざるの風習なれば、此の設備は極めて重要なるものであらう。

以上の如く見ても櫃臺が如何に大切な店舗の構造物であるかが判るであらう。

支那社會の半植民地制或は半封建制は當然通貨の各種多樣性と、そしてその價値の變動性とを特徴とする。歐米の帝國主義國家群は、自國の中國に對する政治的經濟的植民地制を要求確立せんがため自國の法貨に結びついた通貨を中國各主要地に强制流通させる。

櫃臺

そして又各地の封建的軍閥または地方政權は自らの地盤と利益を獲得せんがため自らの通貨を中國民衆に流通を强要する。而も之等の軍閥、地方政權は歐米帝國主義に依存しなければ自らの利權を確保することは不可能であつたために、歐米帝國主義國家群の通貨と封建軍閥、地方政權の通貨は極めて密接に結びついてゐる。かくして中國には實に雜多な通貨が流通し、而も之等の通貨は國際情勢の推移により急速に價値を變動するとともに、中國國内の自然的または人爲的災害或は工作のために變轉し、昨日の黄金は今日の紙切れとなるやうな現象は平常のことであつた。特に軍閥が自己の財政建直しのため極めて簡易に自己の通貨を發行流通せしめることを日常茶飯事としたものである。或は軍閥に結びつきを有する地主階級は農民より搾取せんがために通貨の價値變動を敢て續けた。

斯の如く、中國の貨幣價値の變動は極めて頻繁である。その上、中國には僞造通貨が無雜作に横行する。通貨の多種多樣と價値變動性に依つて苦しめられてゐる民衆にとつては、貨幣の僞造は又止むを得ぬことであつたかも知れぬ。

かうした通貨が中國商人の財布の中に入ることを豫想すれば、その際商人は如何にすべきかは自ら判斷出來るのである。

櫃臺の存在理由として、更に又次の樣な事情も考へられてよいであらう。それは中國社會の紊亂、不穩は當然に盜難、若くは强奪を多くするため、それを防止せんとして櫃臺が設けられたものであると云ふ見方である。

商品棚を貨架と稱してゐるが、この貨架は櫃臺のために防がれ、客と雖も櫃臺を乘り越えなければ商品に一指も觸れることは許されない。從つて商品棚の前に立つて一つ一つ商品を手にとつて選擇することは出來ない。店員が商品を貨架から取り出して櫃臺に運んでくれて始めて客は商品を手にとることが出來るのである。

此の如く櫃臺は、商賣の進展を妨げるものですらあり、近代的店舗となるための障碍物であるが、中國では又これあるがために實に手際よく而も間違ひなく取引が行はれてゆくのである。

社會的不安、不良分子の進入を防止する唯一の堤防こそは實にこの櫃臺である。中國社會の特殊性を如實に具現してゐるものと云ふべきであらう。

（筆者は北支那開發會社商業部員）

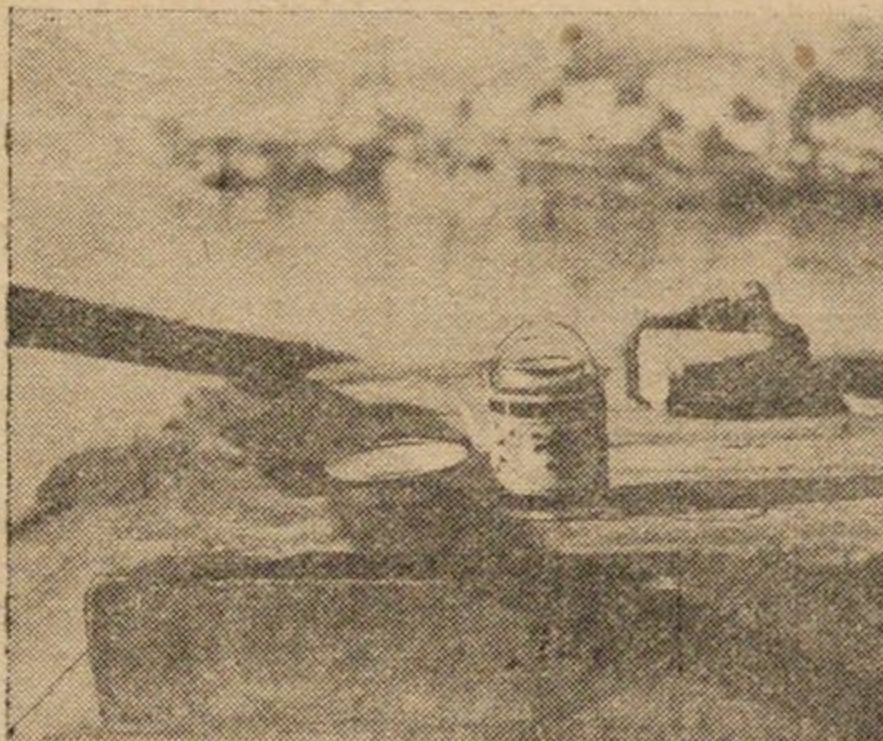
吾が家の食器

吉田璋夫

　院子に卓子を出して、一族の圍む夕飯は夕暮の長い北支の夏の愉しい一つである。この食卓に奈良に住んでゐた頃の古い友達が偶〻訪ねて來た。
『このお膳の上の氣分はあなたが日本に居た時あなたのお宅を訪ねた時とちっとも變らないですね』
『だけど一つとして日本の物はないのですよ。皿も茶碗も料理も…。』
　器物から釀す卓上の雰圍氣が如何にも變らない私の好みであるためにこんな會話が取り交はされたのである。だが卓上の器物は、古い骨董でもなければ特別に高價な物でもない。ただ普通の、あたりまへの品物で北京でも或は北支を歩けばどんな田舍でも荒物屋の店頭にも積み重ねてある品物に過ぎない。而も支那の人達からは、一般に苦力階級の使用する物として今日では蔑まれてゐる物ばかりである。ただそれ等の物の中から物が選擇されてゐるまでである。併しこれ等の物も中には少し使ひ古されて味がつくと骨董屋の棚にまぎれ込んで宋磁宋磁とか大明とか呼ばれて噴き出す程高値に吹きかけられる物もある。

　私の食卓を飾る器物は今も燒かれてゐる磁州の彭城鎭、河南の李河、井陘の南横口、山東の博山、唐山の田舍の物、それに江西磁の賣れ殘りの赤繪や藍繪の下手物、また時々大きな物で食卓の中央に座をしめる唐三彩のやうな黄や緑の軟い燒き物で北支の平地では何處でも作られてゐる物である。併しその多くは宋の磁窯の流れを汲んだ物が多い。色彩は黒か白。模樣は白掛けをした上に鐵で簡單に描かれた物が擇ばれてゐる。斯樣な澁さの好みは、物は支那の物であつても既に吾々日本人には茶祖達が傳統的の好みとして、吾吾の生活中に流してくれた物である。

　私の選擇に何の不思議もない。支那の現地の物を使つて、支那で日本人的教養の生活をすることは、よき選擇さへあれば今日易々たる事柄である。それはただ食器に限られた話ではない。私は曾つてこの事變の當初、北支の山野を戰爭して歩いた時、住民の逃げた百姓の窯家に宿泊させられては、その家の調度や器物の美しさに幾度か慰められた。そして若しも支那に住めたらこんな物で暮してみたいと思つた。

　今日、新しい文化は支那には殆ど無いと云つていい。古い文化が死んだままで殘つてゐるばかりであるが、ただ生きたまま而も動いて殘つてゐる支那の文化は歐米の文化の侵入のない此の百姓の生活用具にこそ殘されてゐる

白河船頭の常用茶器

と思ふ。それで私が召集解除になつた後、幸に支那に住めることに決つたとき、私は吾家の生活用具は、はるばる海を越えて日本から持つてくることは止めよう。出來るだけ支那の現地の物を日本人的教養の生活に使ひこなしてみたいと念じて壁に懸ける物も、また書籍さへも持つて來なかつた。私は現在こちらの生活に何等の不自由を感じてはゐないが、ただ時々書籍を持つて來なかつたことを悔ひ、學生時代、白樺の人達に啓蒙されたせゐかデュウラアやレンブラントの畫集などを思ふままに見られないので、ありし日本の吾が家の書齋を懐しく思ふのみである。

　話はまた食器へ戻る。

　私は山西の旅から歸つたばかりである。もう、しまつて置く場所がないから澤山だと家人からこぼされながらも見本にと買つた陶器が昨日屆いた。また新しい器物が私の食卓を賑はしてくれることと愉しみでゐる。

　山西は全く陶器にあつても寶庫であつた。太原の近くの太原縣治峪村から楡次の孟家井、それから南下すれば介休縣洪山村、霍縣東門外屹峪村、それから洪洞、臨汾と、到るところに窯がある。山西の北方寧武縣にも白い美しい陶器が出來る。凡て石炭の採掘されてゐるところ、何處でも窯はあるやうだ。そして山西の窯も土こそ少し硬いやうではあるが矢張り宋の磁窯の流れを汲み、黒釉の物と、白掛けの上に錦繪のある物のみである。殊に楡次の鐵繪の碗や治峪の黒釉の壺、手のある水注には心を惹かれる。

　私達日本人が美しいと感じ、愉しんで使へる物と思ふ陶器に對して現在の

支那の一般の人達は無關心であるばかりでなく農民の使ふ物、苦力碗などとせせら笑つて蔑んでゐる。そして彼等は日本の支那向に造られた安つぽいテカテカした硬質陶器や磁器をその生活中に取り入れ、彼等のまだ生きてゐる古い文化を顧みようともしない。少なからずもどかしい。

支那の人達は磁器は好むが陶器の味は分らぬらしい。何とかまだ脈の通つてゐるこれ等の陶器に手を加へてこの國の人達に自分達の寶を認識させたいものと思ふ。なかなか距離のある話ではあるが日本の學問と藝術が支那の資材と支那の傳統を如何に生かすかは、この念願を開く糸口となり、その事柄は東亜に新しく建設さるべき文化の性格でもあるまいか。

私は山西へ這入る途すがら或る窯を見た。そこでは、洋式の製法を以て陶磁が日本人の指導のもとに造られてゐた。造られてゐる物は洋風化した日本陶器と變りはなく、ただ醜惡なる日本の資本主義生産の延長である。斯様なところに新しい文化の生れることはない。支那の血と傳統の顧みられぬ處に支那の新しい文化は生れない。羊毛は支那產であり、勞働の手は支那人であるだけの天津絨毯と變りはない。

天津絨毯は米國の何を表徴するかを考へたとき、東亜の新らしい文化を目指す東亜の盟主の採つてならぬ道であると思ふ。相手の文化を認め、これを使ひこなしたところに新らしい文化は生れるのではあるまいか。

衣服にも同様な問題がある。

支那服は私は由來嫌ひである。殊に男子にあつては女性的であつて面白くない。それが木綿であればまだしも、人絹や、セル地である場合は、尙更である。日本人でそれを無批判にただ着てらくであるとか、支那に住めばこれをと、着流してゐる人を見る。支那の人より尙更悪い。だが西洋人で多くは宗教家の人達ではあつたがこの支那服をうまく着こなしてゐるのに屢〻出逢つた。

多く生地は木綿か麻であつた。形にも工夫があるのか、この國の人達から受ける感じとは違ふ別な味を持つてゐた。彼等の教養が支那の衣服をこなして新らしい物を造つてゐるのである。婦人の場合はもつと著しい。今日の毛登姑娘の旗袍は凡そ西洋婦人の支那服を着こなした影響が多いものと思ふ。もつさりした褌子を脚線美に替へ、裾を短かくして、颯爽としてゐるのはいいが肩まで出して露出症のやうな姿は歐米文化の殘滓で寧ろ不愉快である。大陸では日本服は不便でふさはしくないと日本婦人が支那服を召すときは、何とか日本人的教養のもとに風土にあつた此の國の衣服をうまく着こなして欲しいものである。

木綿の衣服にしても此の國の人達は百姓の手織の布は粗布と呼んで蔑んでそのよさが分らぬらしい。機械で織つた木綿よりはこの手織の木綿で衣服を作つてはと姑娘に促しても、それは粗布で笑はれますと、見向きもしない。

西歐や日本の資本主義的機械工業の味のない產物の何處がよいのか、これも教養の問題ではあるが外國では欲しくて堪らぬ手工藝の木綿が綿の國である此の國ではあり餘つた百姓の手でふんだんに出來る支那の寶を、この國の人達に改めて認識させるには、此の布の紋様に、織り方に、新らしい工夫を加へる外はない。

日本の藝術と學術を斯うした支那の資材と傳統に取り組ませたいと念願する日本工藝家の渡來を私は切に待望する。

斯くあるこそ此の國の人達の生活指導の方向を明示し、東亜の新らしい文化を生むものであると思ふ。

（筆者は新民會中央總會專門委員）

測石站舍炎上（三）

——石太線匪襲事件の回想——

渡邊庄治

班長が
「決死隊だ。頼んだぞ」
と云ふ。思はず悲壯感にうたれながら徐々に山を下つた。

いよいよ無氣味である。よし、度胸の見せ所だと思つて、私は先頭に立つて兵舍に入つた。小銃の引き金をひかんばかりにし、ぐるりと廻つたが、誰もゐない。なあんだと思ふ途端、ワンワンと小犬が吠え出した。

畜生！ 人の氣も知らないでと、その部屋に踏み込んで思はず一發射つてしまつた。

「しまつた事をした。可哀相に」

私は合掌してこの小犬のために許しを乞うた。一匹の小犬の事がひしひしと胸にこたへて息苦しくなつた。

大急ぎで倉庫に行き、乾麵包、タバコ、ビール、三人で持てるだけ持つてエツサコラサと歸つて來た。

彈丸は乏しくなる。乾麵包を持つて來た時はがつがつ喰べたが、水が無いし喰べられなくなつた。死は刻々に迫りつつあつた。敵は持久戰法に出て、こちらの參るのを待つつもりらしい。見えないと思つて壕を出るとヒユーンと飛んで來る。それが非常に正確である。小便にも出られない。横になつたまま用をすましてしまふ。そしてその上に寢轉ぶより仕方がないのだ。

壕の中で今ではゆとりも出來てゐるポケツトにつつ込んであつた萬葉集に氣がつき讀み出す。と、私は私なりに私の感情を表白せずにはゐられなくなつた。手帳に一つ一つ書き込みながらこの心境は決して萬葉人に對して恥しくないなどと思つたりした。

ふと見ると班長は、ぢつと敵の動靜を探つてゐる。はつと私は嚴しい現實に戻つた。そして歌を作るのさへ悪いことのやうに思はれた。班長はずうと寢てゐない。私達には眠れといふが、自分は壕の中をかけずり廻りみんなを激勵し、そして作戰に餘念がない。伍長で、まだ若い歲だといふのに、この人の落ちつき拂つた擧措には愕いた。むしろ何だか年齢にふさはしくないくらゐである。

ここまで戰ひ得たのも、この人が居つたからだとしみじみ思ふ。自分より二つ下だが、はるかに及ばないものを感じた。

最初から一貫して心配さうな顔や取亂した感情を見せたことはなかつた。

我が方全員〇〇名の中、兵二名戰死あとはみんな重輕傷者、無傷は班長、站長と私の三人だけ。だが站長は持病の神經痛が出たので、あんまり動けない。いたいたしくてならなかつた。

晝頃、飛行機が飛んで來たが、いくら叫んでもわからぬらしく、そのまま陽泉方面に見えなくなつてしまつた。翼の日の丸が目に痛い位しみて胸がわくわくした、手を振り聲をからして、果はぢだんだをふんでも飛行機は行つてしまつたのである。

最後の突擊

四日目の夜、班長は

「我々は適當の處置を講じ、人事をつくして戰つた。もう天命を待つばかりだが、兵隊も死なした。私はこの力の不足を悲しみ恥ぢるだけである。諸君は實によくやつてくれた。旣に彈丸は殘り少く食糧はない。餓死を待つか生捕らるるか、自決するかの瀨戸際に立ち至つた。それより今夜は最後の突擊をしよう。そして潔く日本人として散らう」

といふのであつた。敵の突擊喇叭がきこえて來た。魔術師の吹く死への誘ひの音樂。間もなく鐵條網に迫り、叩き切る音がする。私は金差一等兵の屍體から腰の銃劍を

「お借りるよ。仇をとつてやるからな」

と云ひつつ拔き取つた。この間まで語りあつた人のその肉體。

「突擊」

班長の凛然たる聲が響いた。

すはつと飛び出して、眞暗闇に突進んだ。死骸につまづいて二度ほど轉んだ。そしたら藥盒から彈丸がざざつとこぼれ落ちた。手榴彈が左右に飛んで來る、不發が多い。敵は餘程あはてて居つたのだらう。

たしかに敵の影、わあつ、わあつ、わあつと突込んだ。敵の悲鳴を二、三

聞いたと思つた。が、すぐ靜かになつた。敵は逃げてしまつた。
「みんな引あげろ」
と班長の聲だ。
「成功、大成功だ。大分、やつつけたぞ。まづ今晩はこれつきりきまい。また惜しくない命が生き延びるよ」
と笑つた。さて終つてみると、私の藥盒に彈丸が一つも無い。貴重な彈丸である。闇を這ひずりまはつて、一つ一つ拾ひはじめた。
「おい、どうした」
「なあに、あはてくさつたもんだから轉んで彈丸をこぼしたんだ。われながら賴りない始末さ」
班長が壕の周圍を何か探しまはつてゐたが、
「三人ゐないぞ、やられたかな」
と言ふ。成程、社員で三人ゐないのに初めて氣がついた。
私はもしかしたら、脱出したのかも知れないと思つたが默つてゐた。三人とも重傷を負うてゐたのだ。どうか無事で逃げのびてくれと心に念じた。

×

夜が明けた。五日目である。
よくも守りつづけた。眞に奇蹟とはこのやうな事を言ふのだらうか。いや奇蹟ではない。それは大和魂なのだ。兵隊さんに於ては軍人精神、我々は華北交通精神を發揮したからだ。それは同じく大和魂であつて、いさゝかも異質のものではなかつた。
日常の職域こそ違ふが、職域は横に連なる線であり、縱につらぬく精神に於てそれは同じく滅私奉公の愛國の赤き心であり、金差一等兵がきかしてくれた「てんのうへいかばんざい」の絶對なる、もはや理窟のいらない迸り出でた至高なる叫びでもあつたのだ。それらの大和魂が奇蹟的なことを無雜作にやり遂げて來た。それは不可能を可能に轉ずる偉大なる力であつた。

生き殘つた生命

私達生き殘り十三人は、六日目深夜脱出をした。班長はとても最初からの覺悟を飜しさうもなかつたが、私達は言うた。
「既に全力を盡した。護るべき何ものも無い。ただ全滅を待つばかりだ。今更命を惜しむのではさらさらない。ただ、この命をなんとかもつと有效に使ひ得る法はなからうか。もしこのまま全滅したら、敵に戰果を助長させ、敵の士氣を鼓舞させるだけではなからうか。それより生き殘つた命を、力を、後日にもちこたへ、そして彼等に復讐する。生きるべき命は生きて、もつとよき棄て場所を求むるのは、決して卑怯な振舞ではないであらう。我々の今の立場は決して卑怯ではない」
「君達の氣持はわかつた。俺もさう思はぬでもない。しかし俺の場合、部下を死なしてゐる」

×

その夜は敵の攻擊が際立つて激しかつた。愈々敵も今夜一擧にやる氣らしい。昨日は擊たないから、砲はもう他へ前進したらうと思つてゐたのに、山砲、迫擊、輕機と、すさまじく鳴り出した。殊に無氣味なのは迫擊の音で、シュシュシュと旋行音がゆるく今にも落ちさうに頭の上を越えた。それがズシンと音がしたが炸裂しない。丁度自分の後一間の壕の外であり、
「不發だぞ、やれやれ」
と言ひ合つた。我が方の輕機は始終調子よく休まなかつた。射手が勇敢で非常に正確に射つた。

×

我々は六日目の午前一時頃、その輕機でなほ抵抗するやうに見せるため、盛んに射ちまくらせ、第一組、第二組第三組と續いて東側の絶壁をずり落ちて脱出を決行した。
站長が第一、私が第二、班長と輕機が第三として殿りに引き上げた。
東側は絶壁だから、敵は圍みを空けてゐたので、無事三組が合して川傳ひに陽泉に向つた。
幸ひ星もない暗夜。川は二十一日の雨で增水して大分引いたものの、まだ深い所は胸先まであつた。ただ川音が高いので足音がひびかない。勿怪の幸である。
振り返つてみると、私達が脱けて來た山のトーチカは、砲彈が命中したのだらう、炎をあげてゐるではないか。
今頃、敵は進入してゐるかも知れない。私達は足を早めて川向ふの北の山にのぼり、一路陽泉を目ざしたのだつた。しかし、陽泉がどうなつてゐるやら、敵は何處にゐるやらわからないから、陽泉に着いて初めて助かつたのだと知つたのだつた。
途中、坡頭、賽魚間は敵が盛んに破壞中で、枕木が一本一本燃えて丁度提灯行列のやうにえんえんと炎の列がつづいてゐた。
とにかく私達十三名（兵十人、社員三人）は、無事に七日目の夕方、陽泉にたどりついたのだつた。
高野班長及び輕傷の兵四人は、翌日休養する間もなく陽泉から出る討伐部隊に加つて測石に向つた。（完）

（筆者は華北交通社員）

可園雜記

加藤新吉

釋迢空氏が初秋の夕のひと時を可園の院子ですごされた。卽興一首

北京の空午後の七時にあかるくて
こまごまと動く楡の木のうれ

屋根越に仰ぐ梢が殘照を浴びて、深い空を背景にまことこまごまと動いてゐた。この木、幹にも枝にも洞があつて小鳥が巢をかける、塒にする。啄木鳥がいつもこんこんと叩いてゐる。さうしたかあいい者のいとなみもまた院子からよく見えるのである。

毎年、夏から秋への變り目は突風が吹き起る。薄暮、天の一角に怪しい雲が現はれるとみる間に凄い風と埃と雨と雷電とが一時に襲つて來る。その瞬間きまつて電燈が消えると、あとは引きりなしの電。その電の裡で木といふ木が搖れて揉まれて渦を卷く。めりめりと枝が裂ける、捩ぢ切られる。日本の夕立の爽快さではない、世の終みたいな凄慘な一時間である。可園の楡の木は老木であるだけに毎年かくて痛ましく姿を變へて行く。

去年は徑一尺の枝が落ちて一本の楡は半身になり、同時に柏樹の半身をたたき潰した。横にあつた臭椿が遽ににょきにょきと枝を張り出した。臭椿は莊子の樗、大樹なれど繩墨に中らずと謂ふ不材の木、和名ニハウルシ、私の鄕里ではシンジユといふ。惡木は榮え良木は摧殘して蓁莽に沒する。杜甫のうたひさうな情景である。

臭椿に對する香椿も一本ある。之をチヤンチンといふは發音の訛か日本の椿に非ずとの意か、とまれちやんと學名になつてゐる。春、その異香ある若芽を刻んで生豆腐にふり、或は麥粉で卷いて油でいためて春捲兒といふものを作る。春もまだ淺い頃これをたべて一陽來復の感懷に耽るのである。

構、和名カヂノキが庭の隅々に密生して居る。花は實のやうな綠色の球、その中から無數の核果が伸びて赤熟すると却て花のやうに見える。鳥が喜んでくはへて行く。クハ科、樹皮は紙の原料。

七夕のとわたる舟のかぢのはに
いく秋かきつつゆのたまづさ

幼い頃祖母に教はつて譯も判らずに七夕の短册に書いた歌。可園に住んで初めてカヂノキを見その名を聞いた時に思ひ出した。そしてかぢのはは檝の端と構の葉とをかけて紙を意味したものであらうと解した。ところが、ふと大言海をみたら「七夕ニ此葉ニ歌ヲ書キテ織女星ヲ祭ルコトアリ」として、「天の川とわたる舟のかぢのはに思ふことをも書きつくるかな」といふ後拾遺の歌が擧げてある。まさかと思ひながら葉を摘んで書いてみると、實に氣持よく筆が走つて乾いた後の墨色の美しいこと、これなら相聞の歌の一つもものして贈るにふさはしいと思つた。

家人が屢〻手折つて活ける木、支那語の先生の羅老人は珍珠蘭と敎へたといふ、和名はエゾノホザキナナカマドである。私が大連の滿鐵本社にゐた頃今は亡き石本憲治氏を主唱者、佐藤潤平氏を指導者として野外に出て植物を見る會があつた。日曜を愉快に野で過すのが目的できまつた規則も會員もなかつたが、學ぶ所が甚だ多かつた。此木もその長い名も其時に知つたのである。佐藤氏著はす所の滿洲造園植物にも出てゐる。來る十月六日は有爲の材を擁いて餘りに早く死んだ石本氏の六周忌、いろいろ思ひ出すことが多い。

支那關係圖書紹介 2

氣候

恐らく文化形式の發生に最も重要な關係をもつてゐると思はれるこの方面に關し、或は比較的よく詳說するとか或は新しい立場から解明するとか或は更に又華北の氣候と文化との關係につき說明を加へるとか言つた風な書物は不幸にも邦書にその例を見ないのである。極めてテキスト風であるが、古今書院の福井英一郎氏の〃氣候學〃及び日本評論社の支那地理大系自然環境篇中に於ける同氏の〃支那の氣候〃をあげるより外ない。尤も外に雜誌に出たもので、岡田博士のもの—地學雜誌昭和十二年九月號—や矢張り福井學士のもの—地理教育昭和十三年八月號—があるが何れも上記の如き一般向きでもなければ、それかと言つて專門上參考にする程の資料でもない。

尤も事變前は支那側に於いても氣象資料について國外——殊に日本には出し澁つた傾向があつたから一般支那自然の研究家にも入手困難ではあつた。併し支那に於ける氣塊の研究や氣候の研究の參考に資すべきものが出て來てゐるのに注目することの遲かつたのは否めない。まして實態的な文化との關係の究明などやる先生は日本人に居なかつたので、今更慌てるのが無理である。從つて前揭の參考書も、その筆者が北支の實態を研究したことのない人である爲に生ずる不安が處々に窺はれる。實例を擧げると煩瑣に堪へないが氣候區の取扱などがその一つであり、又北支の氣候について〃乾燥してゐるため人體に非常に冷く、恰も身を切る樣〃など言ふ行方もその一つである。

併し今の處右の書に、バツクの〃支那の農業〃—仙波・鹽谷氏譯の方を薦める—の氣候の條を參考されるより外ない。他に中國人や外人のもので紹介したいものもあるが入手難ゆえ省く。

民族

此の方面を大略體質人類學的なものと文化人類學的なものに分けて紹介すれば、先づ前者では今の處やはり、支那地理大系自然環境篇中の鹿野氏ののより外に邦文のものはない。同仁會其の他施療機關や私人の病院は可なり多數あり而も可なりの歷史を有するが斯う言ふ研究をしてくれた人は寔に稀で、從つて鹿野氏のも李濟其の他中國や西歐の人のを拔き書きしたもので、上々とは言へぬが一般の人は一應これに賴るより外ない。

文化人類學の方面で先づ民族性と言ふ問題については刊行の多きに惱まされるがいづれも一家言であり、全的に又學術的に鴻正に近きものは却々得難い。外人のは概してキリスト教的前提があり、日本人のは餘りに結論へ急ぐ焦躁がある、そして何れも科學的な分析の不十分と支那人を直觀する機會の貧困が感ぜられる。

邦文のものとして氣合を掛ける讀者であつたら先づ大谷孝太郎氏の〃現代支那人精神構造の研究〃を薦めたい。同書には主要なる外人及び日本人は勿論中國人の所論を紹介し摘要してある。

もつと碎けて氣輕に讀まれるものにはスミスの〃支那人の性格〃（白神氏譯〃支那的性格〃）がいい。上述大谷氏の著書の中にもあるから重複される必要もないと思ふがスミスの著作は其の他の二三と共に筆者は發行當時より人にも薦めてゐたのであるが事變前に彼の書を讀まうと言ふ氣に迄大衆はなつてゐなかつた。尤も彼の記述にも尙分析の不足や時代の變移につれての不備はある。その他では永持德一氏の〃漢族の性格を語る〃や、大每の〃支那人〃など實にいい本だと思ふ。もつと碎けて實話を多く讀む手にカール・クローの〃四億人のお客樣〃〃支那人氣質〃や山崎百治氏の〃これが支那だ〃といふ樣なものになると思ふが、殊に後者は題が大上段にかかり過ぎる。其の考察及び記述のし方に考慮はされてゐるが判斷が素朴なのは惜しい。

昭和十六年十月十五日印刷納本
昭和十六年十一月一日發行

十一月號
（毎月一回一日發行）

編輯者　北京・華北交通株式會社 營業局　加藤新吉
發行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉
印刷者　小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社　大橋松雄
發行所　東京市麴町區三番町一　第一書房
振替東京 六四二三番
電話九段（33）一一四一五番 三三四四番

會員登錄番號 一一六五〇八番

一册定價㊖三十錢（郵送料一錢五厘）
一ケ年分　金三圓六十錢

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社
廣告取扱　一手取扱所　大阪市西區京町堀上通一丁目二五　一新社　電話土佐堀九三九

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十六年[illegible]五日印刷納本　昭和十六年十一月一日發行(毎月一回一日發行)第三十號

北文館　定價三十錢